

『古事記』隱伎之三子嶋の地名起源（三）〔完〕

——並びに「雙生億岐洲與佐度洲」（『日本書紀』）の意味——

旦あさけ

服部

目次

はじめに

一 島根半島陸上からの「三子」・「双子」の景観追跡

〔夫妻女子大学紀要－文系－〕第35号掲載（前編（一））

前編（二）の誤植等訂正

二 鳥取県西部沿岸陸上からの「三子」・「双子」の景観追跡

三 島根半島沿岸海上からの「三子」・「双子」の景観追跡

四 地藏崎島前間航路上での「三子」の景観追跡（-）

—B論文の修正と再確認—

五 地藏崎島前間航路上での「三子」の景観追跡（-）

—前章追跡の再検討と再確認—

六 島根町野井漁港島前間海上での「三子」・「双子」の景観追跡

—『風土記』の官船航路を考慮しつつ—

七 「三子」の景観追跡（第1章～第6章）小結

八 隠岐海峡に於ける古代の舟運

附 地図(1)～(5)、図(1)～図(35)（第1章～第3章使用分）

〔夫妻女子大学紀要－文系－〕第36号掲載（前編（二））

以下本号掲載

前編（一）の誤植等訂正追加
前編（二）の誤植等訂正

11 18行目　水没し且つ、↓水没し、且つ
12°下段 13行目　見える↓見える。
22 べ下段 6行目　松本 昇氏→木村 昇氏
24 ペ下段 19行目　大小の岩も→大小の岩が

前編（一）の誤植等訂正（誤→正）追加

（終）

九 「双子」の景観追跡（第1章～第6章）小結
十 島根半島（七類港）島後（西郷港）間海上での「双子」（・「三子」）
の景観追跡

十一 隠伎之三子嶋（億岐三子洲）の地名起源

—B論文結論の補足、および島前内での景観と三子

嶋（洲）の地名起源—

十二 「雙生億岐洲與佐度洲」（『日本書紀』）の意味
十三 終りに——隱伎之三子嶋（億岐三子洲）・「雙生」の大和朝廷
への伝承経路

附説（1）佐渡島と能登越後間の古代海上交通

附説（2）越洲能登半島説（A論文）の再検討

附 写真(1)～(3)、地図(6)、図(36)～図(70)（第4章～第8章）
使用分）、図(71)～図(79)（第10章～附説（2）使用分）

（終）

30ペ段18行目 12ページ後の→12ページの次の

に収録した文献は除外する。論文の本文中には、これまで同様に著者名・西暦・引用ページを略記する。

前編(二)の誤植等訂正（誤→正）

6ペ下段20行目 前節に述べる→前節に述べた。

8ペ下段13行目 地蔵崎燈台→地蔵崎燈台下

11ペ上段16行目→17行目 『記・紀』神話の→『紀』の

13ペ下段12行目 三子→「三子」

17ペ上段8行目 一致しないから、→一致しない。

17ペ上段9行目 スケッチの中でも→スケッチの中でも、

20ペ下段7行目 先→无

22ペ上段1行目→2行目 その西方の赤崎→その東方の赤崎

地図・図面・写真の掲載について

前編(二)に於て、前編(一)の「はじめに」で地図・図版・写真は連載の最終巻の巻末に掲載するとした方針を変更し、研究の全般に亘って使用する地図(1)～(5)を前編(二)の巻末に収録した。また、第1章(前編(一))から第2章・第3章(前編(二))で使用する図(1)～図(35)も前編(二)の巻末に収録した。

前編(二)で使用する図(36)～図(70)(第4章～第8章使用分)は、紙幅の都合で前編(二)には掲載しなかった。

本号では、残りの図(36)～図(70)と共に、第10章以降から附説(2)に亘つて使用する図(71)～図(79)を巻末に収録する。また、新たに地図(6)を巻末に加える。本文中に掲載する図(ウ)～(オ)は、前編(一)図(ア)～(イ)からの続きである。

写真(1)～(3)・(4)は、本文中に掲載する。

引用文献は、前編(一)と同様巻末に纏めて掲載し、前編(二)の巻末

執筆中にも論文当該地域の行政区域の変更・地名の変更があった。本論文では旧行政区画・旧地名により記述する。

九 「双子」の景観追跡（第1章～第3章・第6章）小結

前編(一)第1章の考察によれば、島根半島西部では島前と島後が重なつて見え、島根町瀬崎(前編(二)地図(1)8)附近から、

島前島後が二つに分れて見え始めるけれども、少なくとも私の体験では島根半島陸上からは島後の島影が薄く、見る場所の標高が低ければかなり水没し、航海中に見た時のような島前と対等の量感で並んだ時と同程度に感じたことは一度もなかった。ただ、(第1章)第15節笹子での「意識的に双子として見ようとすれば見える。」(野帳)と第19節地蔵崎燈台下での観察時、私が意識的に眼を凝らしたために「島後は遠いが双子に見えないこともない。」(野帳)があるだけである。(前編(一)12ペ下段9行目～16行目)

次に、前編(二)第2章の考察によれば、鳥取県西部陸上からは、私の観察時には好天時でも「島後は遠く霞むか、もしくは全く見えなかつた」(前編(二)6ペ下段22行目～23行目)。大山町妻木晚田遺跡(前編(二)地図(1)33)から最も良く見えた時の内田浩文氏の印象によれば、島前の方が濃く、島後は淡かつた。両者は対等の量感ではなく、島前の方が少し小さい。両者の間隔は広く、仲良く並ぶとか連れ添つてゐる、という印象はなかつた。少し離れて横に並んでいる、という感じであった。(前編(二)6ペ上段17行目～21行目)

この他、鳥取県西・中・東部沿岸陸上から隱岐島を望見した経験者の方々のご報告とカシミールのデータからは、「(前編(二)地図(1)32(名

和町御来屋）から東方に進む程、特に標高の低い地点からは双子の景観の得られる可能性は非常に小さくなるものと推測される。」（前編）⁸～上段⁵行目～⁶行目）。

「鳥取県の海岸部から島前と島後とで二つの島に見える可能性は、海岸線が隱岐に向かつて北西に突出する名和町からその約5km東隣の中山町にかけてが最も大きいと推測される。」（前編）⁸～上段⁹行目～¹¹行目）のであるが、私の觀察できた名和町御来屋（前編）¹地図⁽¹⁾、図⁽³²⁾～⁽³³⁾からは、「余り良好な条件下ではなかつたけれども、「島後が特に見えにくく」、双子の印象はなかつた。（前編）⁴～下段⁸行目～¹⁴行目）。これは、島前と島後が名和町から等距離にないためである。

遠藤師夫氏が名和町・大山町からスケッチして下さった際に、「三子・双子の景観は意識して見なかつたため不明である。」とせられ（前編）⁸～上段²¹行目～²²行目）、名和町在住の富長一郎氏が、子供の頃「隱岐島は一つの島だと思ひ込んでいた。」とせられる（前編）⁸～下段⁷行目～⁸行目）のは、島前島後間の距離が大きいためであろう。

結局、鳥取県側陸上からの島前と島後の景観からは、B論文で体験した航海中の「両者は全く対等の量感で並び、正しく『双子』であつた。」（前編）³～下段²²行目～²³行目）という程の強い印象が得られる可能性は、小さいものと推測される。

次に、前編²第3章の島根半島沿岸海上からの觀察6例中でも、B論文の航路上（前編）²～⁴（⁷）～^Dに於て島前と島後が対等の量感で並んだ景観に匹敵する事例はない。この航路上での強い印象にはほとんど及ばなかつたが、多古鼻冲合（地図⁽¹⁾5・図⁽⁵⁾）の「双子の印象あり。」（野帳）の一例があるのみである。多古・沖泊は近い時代まで僻地であり、此処からの景観の知識が「日本書紀」に齎されたとは考え難い。

最後に、前編²第6章の島根町野井漁港と島前間海上での觀察では、地図⁽⁴⁾～^f地点（前編）²～⁴（⁵⁹）（本号掲載）に到り、「島前島後との量感対等となり、双子に見える。」と明確に記録する（前編）²～⁴（⁶⁰）（⁶行目）。

この^f地点は、「フェリーグルーパー丸」の島前地蔵崎間の航路上にほぼ一致する。

十 島根半島（七類港）島後（西郷港）間海上での「双子」 （・「三子」）の景観追跡

（1）「フェリーグルーパー丸」による景観追跡

前章の「小結」の結果、「双子」の景観は、隱岐海峡で得られる可能性が最も大きいと予測される。そこで、B論文の「両者は全く対等の量感で並び、正しく『双子』であった。」という地点の緯度経度を確認し、その都度写真撮影とスケッチを行なうために、島根半島の七類港（地図⁽¹⁾19）。『風土記』質留比浦）と島後の西郷港（前編）²～⁴（⁷）～^Dを結ぶ航路で追跡した。

平成12（00）年8月15日、B論文時とは逆方向の進路を取る七類港午前9時0分発西郷港行きの「フェリーグルーパー丸」（峰坂堅夫船長）に乗船し（以下、前編）²地図⁽⁵⁾・本号図⁽⁷⁾～⁹（⁷³）参照）、出港時からア地点まで操舵室（海面からの高さ12m）で、イ地点から最終のツ地点まで操舵室上階の羅針儀甲板（海面からの高さ14.4m）で観察し、写真撮影（続けてスケッチを行なつた）の地点を即時加村吉行操舵手に船舶用GPSで確認の上、海図に記入して頂いた。

この日は「最近にない上天気」（峰坂堅夫氏）であったが、出港後17分の午前9時17分ア地点（図⁽⁷⁾。35°36'55.80"N・133°15'30.60"E）では島後はまだ見えなかつた。このア地点で図⁽⁷⁾「島前が三子に見える。」（野帳）。ア地点と同一地点は「島前三子の景観追跡①・②」（前編²～⁴（²）～³）にはないけれども、ア地点から焼火山頂上を結んだ線上に近いのが、漁船で追跡した前編²地図⁽⁴⁾～⁹・本号図⁽⁵⁷⁾～⁽⁶⁰⁾である。この図⁽⁵⁷⁾には「三子に近づく。」（野帳）とあり、図⁽⁶⁰⁾には（^f地点）「図⁽⁵⁹⁾よりもさらに三子に見える。」（野帳）とある。ア地点図⁽⁷⁾は海面か

ら12mの高さでのスケッチであるから、地図(4)d・g付近で見る景観を約9km・10.5km南方に於て見ていることになるのである。ア地点は、地図(2)の地蔵崎から焼火山を目指にして進む隱岐汽船の航路から西方に約5kmの地点であるから、島前の「三子」の景観を得られるのは、地蔵崎島前間の隱岐汽船航路上だけに限定されたものでないことが判る。従つて、ア地点附近を通過して焼火山或いは知夫里島の郡添方面に向かうコース上でも、島前の「三子」の景観は得られることになる(第6章第2節末(前編)[19以下段3行目～9行目)参照)。

午前9時23分、イ地点・図(7) (35°38'51.60"N・133°15'50.40"E)に達すると、島前ABCは一続きに繋がり、島後Eの島影が見え始める。しかし、島後の島影は遠く、島前に比して薄いため、「双子」の印象はない。

9時32分、工地点 (35°41'31.20"N・133°16'21.00"E) デ、島前は1島として見え、島前と島後が対等の量感となる。そして、9時35分、オ地点・図(7) (35°42'17.40"N・133°16'30.60"E) で確実に「双子」という印象を受けた。即ち、島前島後の大ささはほぼ等しく、且つ両者は大きく距らずに横並びする。島後Gの島影は、島前A～Dに比してやや薄いが、今までよりも濃くなり、島後の山並みの標高が島前よりも高いため量感は島前に劣らない。」のオ地点は、弘進丸での前編(2)地図(4) (島前三子の景観追跡③)。e・本号図(5)の地点に近い。e地点では、「島後がやっとスケッチできる程度」(野帳)だったから、この「フェリーケーにが」の時には、見通しが効いたのである。オ地点以後も、島前島後が対等の量感と大きさで横並びする景観は持続し、10時20分、島後にかなり近附いたと感するシ地点 (35°56'24.00"N・133°19'14.10"E) スケッチの図面は紙幅の増加を考慮して省略) や「おだ双子」(野帳)である。10時23分、ス地点 (35°57'29.40"N・133°19'24.60"E 図面省略) では、「島後の方が大きくなり始める。それでもまだ双子」(野帳)である。10時32分、ソ地点 (36°00'8.40"N・133°19'49.80"E 図面は省略) でも、「島前は知夫里島の間が切れるが、

大した断絶ではないため島前は一纏まりに見え、島後と共に双子という印象がないことはない。」(野帳)。

ようやく、10時38分の、タ地点 (36°02'4.80"N・133°20'8.40"E 図面は省略) で、「島後の方が大きくなり、量感が対等でなくなる。」そして、「接近するにつれ、それはどんどん進む。」(野帳)。10時45分、チ地点 (36°04'18.00"N・133°20'30.00"E 図面は省略) で、「島後が圧倒的に大きくなり、島前とは完全に対等でなくなり、双子の印象はなくなる。」(野帳)。そして、10時53分のツ地点 (36°06'42.00"N・133°20'48.00"E 図面は省略) で、「西郷湾に近づく。島後が大きく迫まり、島前は少し霞んで、小さくなる。双子ではなく、親子という印象である。」(野帳)となる。そのため、このツ地点で観察を終了した。

右の航海では、「双子」の景観はオ地点からス地点の間で確実に得られ、ソ地点でも「双子」の印象がまだ残つてゐることになる。オ～ソ間はおよそ34km、この時の「フェリーケーにが」で57分間も「双子」の景観が持続した。以上により、この「双子」の印象は、本章以前の島根半島(・鳥取県)沿岸陸上、および島根半島沿岸海上の諸地点で觀察し得た事例よりも、遙かに強いものである。現在の隱岐汽船のフェリーでは、西郷港に向かう往路では船の構造上操舵室に入らないと体験できないが、帰路の西郷港から七ヶ港に向かう後部甲板からならば、乗客は容易に体験できる。私がB論文で、「島前が島後に従属する印象ではなく、両者は全く対等の量感で並び、正しく『双子』であった。」として「感動を覚えた」(B論文16ペ18行目～19行目)のも、同じ帰路の後部甲板に於てである。

平成12(00)年8月15日の観察は、海面から12日・14.4日と高い位置から行なつた。小艇の場合はオ～ソよりも島後に接近すれば同じ景観が得られる筈である。また、ア～ツの航路上に限定されるものではなく、この航路の東西の延長線上の広範囲で見ることができる筈である。古地図によれば、次のよーな隱岐島と島根半島間の航路があつた。

即ち、

① 歴史地理学会（2004.15）掲載「寛永隱岐國絵図」（寛永10（1633）年頃。島根県古代文化センター所蔵）には、現西郷港の下方に「嶋後ヨリ三穂関迄卅六里」と記す。

② 同（2004.3）掲載「正保出雲隱岐國絵図」（正保2（1645）。国立公文書館〈内閣文庫〉所蔵）には、現西郷港から美保関湾に朱線を引き、脇に「此湊ヨリ出雲国美保関迄海上三十六里」と記す。

③ 同じく、現美保関町雲津湾（前編⁽¹⁾）11ペ下段18行目～12ペ上段15行目・12ペ次ページのカラー写真・前編⁽²⁾地図⁽¹⁾21から現西郷港の方向に朱線を引き、脇に「此湊ヨリ隱岐国日貫湊（現西郷港：服部）海上卅五里」と記す。

④ 同（2004.16）掲載の「文政隱岐國絵図」（文政9（1826）年。島根県立図書館所蔵）も、現西郷港から美保関湾に向かつて朱線を引き、「此湊ヨリ出雲國美保関迄海上三十六里」と記す。

⑤ 同（2004.4）掲載の「元禄出雲國絵図」（元禄14（1701）年。個人蔵）では、美保関湾から隱岐国方向に朱線を引き、脇に「此湊ヨリ隱岐国日貫湊海上三十一里」と記す。

⑥ 同じく雲津湾から隱岐国方向に朱線を引き、脇に「此湊ヨリ隱岐国日貫港迄海上三十五里」と記す。

以上の航路をとれば、前編⁽²⁾地図⁽⁵⁾アーツの東西の延長線上を航海することになるから、当時は、今日よりも「双子」の景観に遙かに長時間接した筈である。

また、才地点は右述の如く、弘進丸での前編⁽²⁾地図⁽⁴⁾（島前三子の景観追跡⁽³⁾）e・本号図⁽⁵⁸⁾と「フエリーおきじ」での前編⁽²⁾地図⁽³⁾（島前三子の景観追跡⁽²⁾）キ・本号図⁽⁵³⁾に近いから、「双子」の景観は地蔵嶼、島前間の航路上でも見ることができる。実際、地図⁽⁴⁾・図⁽⁵⁹⁾に「島前島後の量感対等となり双子に見える。」（野帳）とある。

⑦ 右の「正保出雲隱岐國絵図」では、島前の郡港即ち知夫港（前編⁽¹⁾2ペ因⁽⁷⁾参照）から島根半島に向かつて短かい朱線を引き、湾口に「此湊船懸吉」と記し、さらに、知夫里島と中ノ島の間の大口（の瀬戸）

に「此瀬戸間三拾町⁽⁴⁾」と記し、島根半島に向かつて航路と覺しき短かい朱線を引いて、島前と島根半島間の航路のあつたことを示している。これら航路で、地図⁽³⁾キ・地図⁽⁴⁾e・地図⁽⁵⁾才附近を通過した際には、「双子」の景観を見ることができた筈である。

前編⁽¹⁾で、私は「双子」を「二つの島が同一か、相似の姿で共に並んでいると感じられるという意味で用いる。」（6ペ下段1行目～2行目）としたが、この隱岐海峡での観察では、正しくその通りの景観が得られた。特に地図⁽⁵⁾オースでは、同一の島が二つ、さほど間隔を開けずに横並びする。

以上により、島前の三子の景観（前編⁽²⁾21ペ下段25行目～22ペ上段6行目）と同様に、①島根半島東部海岸を出発して島前・島後に向かって航海する時、②『風土記』美保濱を経由して美保崎（地蔵崎）を回り島前・島後に向かう時、③鳥取原の日吉津・御来屋、さらにはその西方沿岸から出発して島前・島後に向かう時、これまでの島根半島東部や鳥取県西部（・中部・東部）沿岸陸上から見た時よりも、遙かに明確に且つ長時間「双子」の姿を見続けることになる。

（2）A論文の「雙生」に関する私説の修正

私はA論文に於て、當時西郷海上保安署長橋本武治氏（昭和50（75）年退職・昭和57（82）年没）の、島前島後で2島に見えるといふ左記のご教示を、佐度洲と億岐洲がそれぞれに雙生するという解釈の傍証とした。しかし、前編⁽²⁾第2章および本章の考察の結果、修正を必要とするところである。即ち、

筆者（服部を指す）は前章に於いて、地理的には一個の島の佐度が、その望観する地点によつては恰も双子の様に二島並ぶ事を指摘した。所が、四島の億岐洲についても、佐度と全く同じ景観を呈する事を知つた。これは地図上でも充分推定出来るが、先の橋

本武治氏の観察では、

本土からはよほど視界が良くないと見えませんが、島前と島後が重なる位置からでなければ二つにみえます。私は鳥取県北条町から一度見たことがあります。島後は一つの島ですが島前は西の島、知夫里島、中の島に分かれていますが、内海からは別ですが外觀は一つに見えますから島後としては二つにみえる訳です。

億岐はその在り方から、殆どの方角から「島に見えるのである。

斯様にして、億岐も亦双子としての景觀を持つ事になるのである。

(A論文80頁上段1行目～12行目。本引用に際し、原文の傍点を省略した)

しかし、前編(一)第2章の研究によれば、鳥取県西部沿岸より東方へ進むに連れ、島前は水没して島後との間に量感の差が生じ、鳥取砂丘センターおよび鳥取ゴルフ場からは、「一つの瘤」となってしまう(前編(一)7ペ段下段11行目・29行目)。橋本氏は、北条町(前編(一)地図(1)32(名和町御来屋)の東約30km)の沿岸陸上からの景觀であるのか、それとも同町沖合からの景觀であるのか記しておられない。地図(1)32の東約13kmの赤崎町の標高23m地点からは、「島前はアカハゲ山・焼火山・高崎山(西ノ島)の高所のみが見え、島後の東南部の低地は水没せずに一緒きの島となる。」(前編(一)7ペ段上段19行～21行目。但し、カシミールのデータ)から、北条町のかなり沖合からの景觀ではなかつたかと推測する。但し、第2章第1節(前編(一)7ペ段～8ペ)と本章第1節の結果からすれば、橋本氏の述べられる「二つに見え」た姿が、「フェリーくにが」で見た隱岐島が対等の量感で横並びした姿と同一であったとは断言できない。従つて、隱岐が「殆どの方角から」「島に見える」という橋本氏の記述によつて直ちに「双子としての景觀を持つ事になる」としたA論文の私説を変更し、「4島から成る隱岐島が『双子』に見える確率が最も高いのは、本土から島前もしくは島後に向かう航海途中である。」と訂正する。

注

(1) 紙幅の増加を避けるため、以下の地図(5)(前編(一))アーツ地点のうち、アーツの緯度経度のイ・オ地点の図(7)～図(9)3枚のみを本号末尾に掲載する。アーツの緯度経度のデータを左記に記す。

N・133°15'50".40"E ハ 9時26分 35°39'57".00"N・133°16'02".40"E
H 9時32分 35°41'31".20"N・133°16'21".00"E カ 9時35分 35°42'17".
E キ 9時47分 35°46'09".60"N・133°17'.20"E ク 9時52分 35°47'
55°20"N・133°17'35".40"E ケ 9時58分 35°49'48".60"N・133°17'57".60"
まう(前編(一)7ペ段下段11行目・29行目)。橋本氏は、北条町(前編(一)地図(1)32(名和町御来屋)の東約30km)の沿岸陸上からの景觀であるのか、それとも同町沖合からの景觀であるのか記しておられない。地図(1)32の東約13kmの赤崎町の標高23m地点からは、「島前はアカハゲ山・焼火山・高崎山(西ノ島)の高所のみが見え、島後の東南部の低地は水没せずに一緒きの島となる。」(前編(一)7ペ段上段19行～21行目。但し、カシミールのデータ)から、北条町のかなり沖合からの景觀ではなかつたかと推測する。

但し、第2章第1節(前編(一)7ペ段～8ペ)と本章第1節の結果からすれば、橋本氏の述べられる「二つに見え」た姿が、「フェリーくにが」で見た隱岐島が対等の量感で横並びした姿と同一であったとは断言できない。従つて、隱岐が「殆どの方角から」「島に見える」という橋本氏の記述によつて直ちに「双子としての景觀を持つ事になる」としたA論文の私説を変更し、「4島から成る隱岐島が『双子』に見える確率が最も高いのは、本土から島前もしくは島後に向かう航海途中である。」と訂正する。

(2) a 「六」・b 「国」・c 「保」の解説は、島根県立図書館北村久美子氏。
(3) a・bの解説は、島根県立図書館飯田奈美子氏。

(4) 解説は北村久美子氏。

(5) 『延喜式』卷26主税上の「諸國運漕雜物功賃」の山陰道には海路を記さず「隱岐國東八十」とのみ記しているため、隱岐本土間の航路が判らない。千田稔(1974:128・194)は、「島後西郷湾内にある「大津」の地名を「国府と関連のあつた港」として、「(こ)から出雲の千酌駅へ輸送した」となる。」とする。この航路が西郷と千酌を直結するものであれば、右の双子の景觀に長時間接することになる。しかし、隱岐国の180束は、石見国の90束の倍もあるから、相当の距離と労力を必要としたことになる。千田稔(1974:80～82)の計算では、海路輸送の方が陸路よりも安い費用でなし得るから、隱岐国から陸路をとつて上京する場合の運賃を示すものではないか。即ち、島後から上京する場合、國府より陸路で、一日西海岸の津戸(現郡万村津戸)の湾に出、そこから島前中ノ

島の東端（右の「文政隱岐國絵図」では、津戸と島前海士郡の「豊田村」（現海士町豊田）と「野田」（豊田村之内野田）である。現海士町豊田内の能田）の湾の間を朱線で結び、「此渡海三里」と記すに渡り、中ノ島を陸路で往き、次いで知夫里島に渡り「郡」（郡衙の遺称）^{…B論文9べ8行目～10べ5行目参照}の湾から千鈴湊に渡海し、以後陸路で上京する運賃が駄別180束となるのではないか。このコースは非常に不経済で労力も過重である。右の条には、「因幡國廿六束。但海路米一石運」の如く、陸路と共に海路も記している。この運賃の条の記載は網羅的であると思われないから、『延喜式』に記されていない隱岐國からの海路のあつた可能性も考慮する必要がある。『延喜式』の時代よりも早いが、『出雲國風土記』の「往来船」^{〔前編〕30べ下段}や「○船可レ泊」と注記した四浦の内、少なくとも久毛等浦・質留比浦については、こうした観点を考慮してはいかがであろうか^{〔特に久毛等浦・質留比浦は隱岐との関連が深いのではないか〕}。主税式の「諸國通二漕雜物」功貨^{〔の東海道・北陸道・山陽道・南海道の諸国には、陸路と海路を並記する例が多数ある。〕}

十一 隠伎之三子嶋（億岐三子洲）の地名起原
——B論文結論の補足、および島前内での
景觀と三子嶋（洲）の地名起原——

(1) B論文結論の補足

第1章から第7章までの研究により、B論文の「隠伎之三子嶋」（『記』）・「億岐三子洲」（『紀』一書第一・第九）の地名起原を、「島前の焼火山を目標として船が進んで行く時に、島前の三島が各々裾を接しながら対等の量感で横に三つ並ぶ景觀に因るものと思われる。」（1ペ10行目～11行目）とした結論は、基本的には変更の必要はないと思う。しかし、これには前編^(一)以来の研究結果による補足が必要とする。

即ち、右の「焼火山を目標として船が進んで行く時」とは、地蔵崎

島の東端を起点とする隱岐汽船の航路である。しかし、さらに広い範囲、即ちこの航路から外れた地図^{(5)ア}を通過して島前に向かう時、島根半島東部北岸を出発して島前に向かう時、鳥取県西部沿岸を出発して島前に向かう時^{〔前編〕21べ下段20行目～22べ上段6行目}にも「三子」に見えた。さらに、地図^{(5)ア}・図⁽⁷⁾は七類港から西郷港に向かう時の景觀であるから、島根半島東部を出発して島後に向かう航海でも見ることができるから、従つて、三子嶋（洲）の地名起原としてこれらの航海体験の印象も排除すべきではないと思う。

（2）島前内での景觀と三子嶋（洲）の地名起原

次に、右の航海体験とは別の観点から検討を行ないたい。即ち、私はB論文に於て「島後が親で島前が子」とは積極的に表現されないが、宣長はその意味をこめていたと思われる。」（B論文7ペ14行目～17行目）と解した。そして、宣長よりも積極的に島後を親、島前が子（で三ッ子）とする説が当山亮通以下倉野憲司に続いているとした（同8ペ1行目～3行目）。即ち、倉野憲司（1974・129）は、「恰も一人の親（島後）が三人の子（島前）を前にしてゐると言つた地勢であるから三ッ子の島と言つたものと思はれる。」（傍点は服部）とする。この親子説に対して、私はB論文の結論で「一見もつともらしいが、実地に航海してみると、地図を上から見た机上の空論に近いものではないかと思うに至つた。」（同17ペ1行目～2行目）と述べた。これは現在でも変わらない。

また、B論文で私は、4島から成る隱岐を「三子嶋」と呼んだ原因として、航海中の島前の景觀と共に、一般に島後が島前に接近しなければ見えにくいということを挙げた（前編^(一)1ペ下段11行目～20行目）こ

れはB論文以後の調査でも体験できた。しかし、私説や右の親子関係で「三子」を説明する説の外にも、「三子」は島前のみを指すと考える説がある。

即ち、西郷信綱（1975・123）は、「隠岐には島前と島後があり、島前が知夫里・西の島・中の島の三島から成るので三子島と呼んだのである。」とする。西郷説の外にも、荻原・鴻巣（1993・55）が「この島は島前と島後に分かれ、島前が三島から成っているので『三子島』といったか。」とする。また、小島憲之ほか（1994・31）も、「隠岐島は四島（島前・島後）から成るが、『三子洲』は島前の西ノ島・知夫里・島・中島を擬人化した命名か。」とする。

私はこれらについても、机上の説の感を抱く。しかし、『記』の「亦名『天之忍許呂別』に着目した場合、島前に向かう航海中の景観のみに三子島の地名起原を限定することは、慎重を要すると思う。確かに、亦名は『記』にのみ記されているから、『記』の編纂時に加えられたものであろう。淡道之穗之狭別嶋に亦名がないのは、淡道嶋と亦名の合成（『紀』は總て淡路洲）によるもので、伊豫之二名嶋と筑紫嶋に亦名がないのは、面毎に名を附したためであろう。佐渡嶋に亦名がないのは、恐らく編纂時の見落として、深い意味はなかろう。

従つて、隠岐の三子島の島名の発生と天之忍許呂別の命名とは同時期ではないと思う。しかし、「忍許呂」の形容が既説の如く、島前全体の形状から生まれたとするのではなく、以下の私説の如く、島前内海での景観から生まれたとするならば、この観点からも、「三子島」の地名発生を検討する必要がある。

即ち、倉野憲司（1974・133）は、「忍」について「押し」と同じで、「押しなべる」とか「一体にする」とかの意と思はれる。」とし、「許呂」については、「凝」の意であり、

隠岐は右の四島の外に小さい島々が百七十九もあるといふことである。従つて「オシコロ」は「大群」（山田孝雄説：服部の意ではなく、「押し凝」即ち「押しなべて凝つた」又は「一体に凝つた」

の意であると思はれる。

別を島前・島後と179の小島から成る隠岐諸島全体の人体化とする倉野説については反対する。同じ観点からの「大群・大凝」の意とする山田孝雄（1950・223～224）に対しても同様である。即ち、両説とも地図上の感覺によるものと思われるからである。

私の島前と島後をほぼ一周した体験（昭和49年4月上旬。島前はその後4回上陸している。両者の海上と陸上からの観察は、前編（一）以降記した機会である）によれば、島前島後の4島が特に大きいため、4島周辺の島々の存在感は非常に稀薄である。このことは、本号の写真（1）（3）（島前のみであるが）によつても、ある程度推測頂けると思う。島前島後間は最短距離で約2.5km離れており、航海中に「双子」に見えることはあっても、島前島後およびその他の島々とで「大群」（大凝）或いは「一体に凝つた」という印象を受けた経験は一度もない。

「多数の島々が凝集する」という印象を求めるすれば、私の体験による限りでは、航海中に島前に最接近した時である。即ち、前編（一）地図（3）イ・図（48）から地図（3）ア・図（47）と船が接近するに連れ、中ノ島と知夫里島の属島が明晰に見え、天候条件が良ければ島前の後には島後の島影も見える。ア地点から島前により接近すると、さらに属島の数が増し、島後は中ノ島の蔭となり見えなくなる。

この景観は、三子島（洲）のこれまでの私説にとつても有利のようである。しかし、島前内での景観、なかなか内海水道航海中の印象も無視し難い。写真（1）～（3）は、西ノ島の最高峰焼火山頂上から島前を360度パノラマ撮影したものである。この時私は、3島が「押（圧）し凝」つてゐるという印象を強く受けた。焼火山は、前編（一）第1章1節に述べた如く、隠岐国の中島前から本土の烽（島根半島の旅伏山。さらに天平六年の符が隠岐國との連絡用の烽の増置であれば枕木山が加わる（前編（一）14頁上段31行目～下段16行）の私説参照）に連絡する烽を設置するのに最も適している（知夫里島のアカハゲ山（写真（1））は、焼火山の手前に重なるため、本土

写真(1)～(3) 隠岐島前360度パノラマ 西ノ島焼火山山頂より (S・W・N・Eは南・西・北・東の方位)

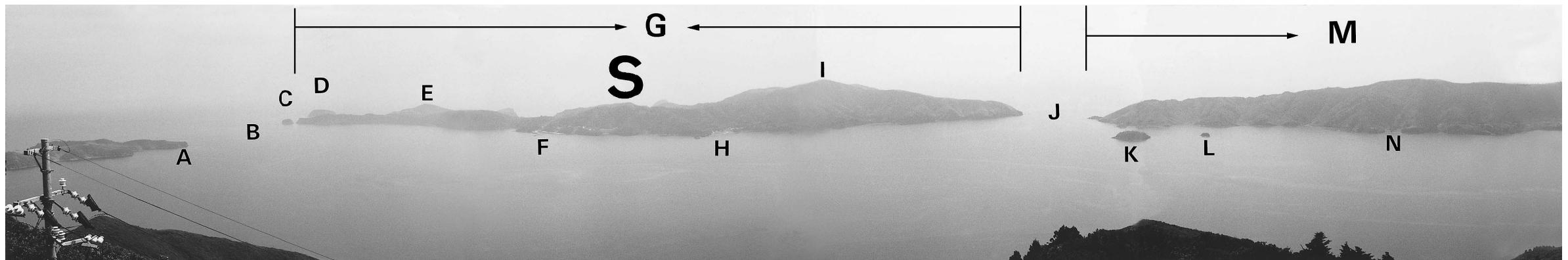


写真 (1) A 中ノ島木路ヶ崎 B 大口 C 竹島 D 大波加島 E 高平山 F 来居 (くりい) [S 南] G 知夫里島 H 古海 (うるみ) I アカハゲ山 J 赤灘の瀬戸 K 大桂島 L 小桂島 M 西ノ島 (写真<3>Mまで続く) N 珍埼



写真 (2) 写真(2)は全部西ノ島 [W 西] O 赤江 P 由良 Q 浦郷 R 摩天崖 S 船越 [N 北] T 別府

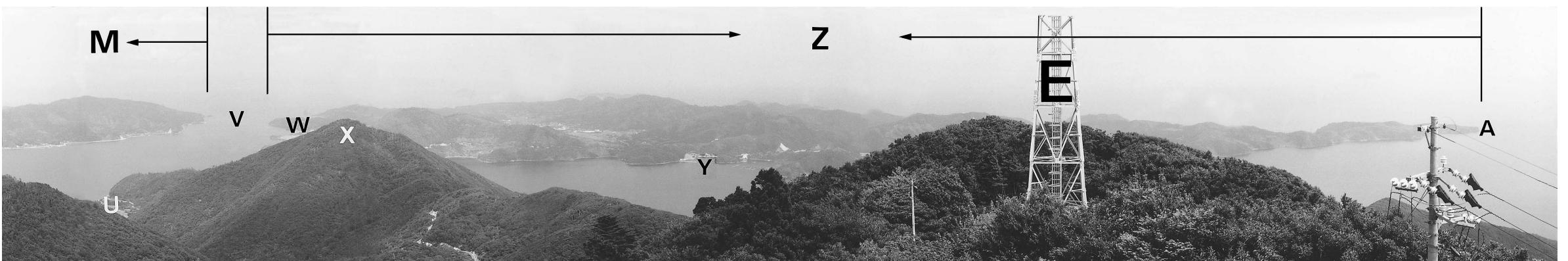


写真 (3) アンテナの立つ手前山塊は西ノ島 M 西ノ島の北東端 (海岸集落は左から物井・倉の谷・宇賀) U 大山 V 中井口 W 中ノ島菱浦 X 高平山 (たかびらやま) Y 日津 Z 中ノ島 [E 東] A 木路ヶ崎

(平成12年'00) 年8月20日 (晴) 撮影 50ミリレンズ)

との連絡用烽の設置場所として不適当。前編(一)7べ下段3行目～16行目・14べ上段31行目～下段16行目・前編(二)図(1)(2)参照から、古代にこの写真(1)～(3)の景観を見た人々はいたであろう。写真は西ノ島の側から撮影しているため、西ノ島が特別に大きく(写真(1)～(3)M)、3島の中で最も小さく、且つ南方(写真(1)Sの方向が南方)に伸びる知夫里島(写真(1)G)が極端に小さく写っている。知夫里島の最高峰アカハゲ山(写真(1)I。標高324.5m)山頂から撮影すれば、知夫里島が強調されて見える筈である。その場合でも、3島が「凝縮」しているという印象に恐らく変りないであろう。

さらに、3島が、「凝縮」しているという印象は、島前の山上からだけではなく、島前の内海水道を航海している時にも受ける。隱岐海峡を渡り終え、知夫里島と中ノ島の間の「大口」の瀬戸(写真(1)左端B)を通過して内湾を進むに従い、この感は強まる。島と島が凝縮しているという印象を受ける機会としては、山頂でよりも内海の水道や陸岸の方がより一般的であろう。写真(1)～(3)による限りでは、知夫里島の存在感が他よりも弱いように見えるが、内海水道を航海する際は視点が低く、且つ写真(1)～(3)の如く島前全体を一望に收めることはできないから、知夫里島だけが2島に比して量感が格別に劣り、存在感が希薄であるという印象は受けない。

確かに、「隠岐」は「沖」の意(B論文3べ3行目)であるから、隠岐之三子島(億岐三子洲)という地名は、本土側の立場から生まれたものであろう。その点でも私説(隠岐海峡での景観)には都合良いかも知れない。それでも島前内部での景観を起原とする可能性を考慮外に置いてはならないと考える。これは、B論文以来の私の研究経過と矛盾する感を与えるかも知れないが、千三百年以上に溯るであろうこの地名起原の問題を、軽々しく、現代に生きる私個人の体験によつて完全に説明できるという態度はとりたくないのが本意である。

*

*

*

『古事記』隠伎之三子島の地名起源(三)〔元〕

本文、一書第六・第八の億岐洲と佐度洲を「雙生」する意味について、

十二 「雙生億岐洲與佐度洲」(『日本書紀』)の意味

(1) 億岐洲「雙生」の意味

名天之忍許呂別も、島前の景観(恐らくは伝聞)に基く命名の可能性が大きいと思う。従つて、三子島(洲)を以て隱岐島全体を表すと考えた『記・紀』の編集者には、隱岐が島前島後の4島から成るという知識がなかつたものと考えられる。第13章に後述する如く、『記・紀』の地理的な認識不足は諸所に見える。

B論文に於て、「三子」が航海中の景観に起因するという私説の結論を述べた後、なお慎重を期して左の注を附した。即ち、

以上の考察で「三子」の問題は説明出来ると思うが、次のように

な可能性も考慮外に置くべきではないと思う。『記・紀』成立よりもはるか以前に「隱岐」と言えば島前の三島のみを指したが、やがて「隱岐」という名称に島後を含めたものに変つた可能性である。(B論文17べ15行目～17行目)

しかし、本論文で右の如く『記・紀』の(編集者さらには原資料作成者の)地理的知識不足と考えるに至つたから、この注記を撤回する。

注

(1) 同時に「島根半島の東端、美保関(みほの)から隱岐島への海上交通からの視点でいったものか。」と、私説も取り上げている。

(2) 山田孝雄(1940・223～224)は、「島後を親とし、島前を子として孫が百七十九もある。斯様に考へてみると、大群、大凝の意味で云つたのではないと思ふ。」とする。

私はA論文に於て、萩野由之の「與」の字が「同格にて雙生を兩方へかけて意味を有たせたるものなり。」として、億岐と佐渡とがそれぞれに雙生したとする説を、高木友之助氏（當時中央大学文学部・漢文學）の「（萩野の）解釈が全面的に否定されるものではない」という私の教示、および、隱岐島と佐渡島が實際に本土・海上から2島に見えるという現地報告に基いて支持し（A論文79頁下段12行目、80頁上段13行目）た。そして、B論文に於て、航海中に島前と島後が「全く対等の量感で並び、正しく『双子』であった。」ことを確認し、前編（一）本号の研究によつても、隱岐海峡の航海中にこれが体験できることを再度確認した。確かに、前編（一）第1章・前編（二）第3章の島根半島陸上と沿岸海上からは、「双子」の印象はほとんどなかつた。前編（二）第2章の鳥取県西部沿岸陸上からの観察時に島後が明瞭に見えなかつたため、現地の方々の報告とカシミールを参考にして、鳥取県西（中・東）部陸上からは、「双子」としての印象の得られる可能性は小さいと推測した（前編（二）8頁上段4行目～下段20行目・本号第9章（2ペ下段26行目～3ペ上段19行目）。私自身による更なる観察を必要とするが、目下のところは億岐洲の「雙生」は、航海中の景観に起因する可能性が最も大きいと考える。

(2) 佐度洲「雙生」の意味

前節に述べた如く、A論文に於て、佐度洲の「雙生」も、この島の南北・北東方向からの景観に起因すると考え、萩野由之の佐度の地名起原を「大佐渡に小佐渡相對して門をなし。潮汐往來すへき國なれば。此名ありしならん。」（飯田武郷〈1922：113〉）に対し、私は「實際の地形から起つたのではなく、海上或は本土から遠望した時の『海峡（ト）』により分離しているが如くに見える」景觀から生じたものと考へた（A論文73頁上段12行目～17行目・75頁下段4行目）。

このA論文の私説は、隱岐島の景觀調査と本論文執筆に追われ、実地調査による確認を行なつていない。こちらも、緯度経度を明

記した肉眼による印象の記述・スケッチを行なう必要がある。そこで、A論文執筆の際に海上保安庁七尾海上保安部のご協力を頃いたご縁で、巡視船に乗船して観察することを七尾海上保安部管理課長古木良一氏にお願いした。しかし、法規上許可されなかつたため、代りに、当該の海域を通過する際船長が観察・記録して下さることとなつた。

その結果、能登半島北東部海岸にある小木海上保安署（石川県珠洲郡内浦町小木）の巡視船「おぎかぜ」船長西澤哲也氏より、次のスケッチを平成16（'04）年9月17日附で頂いた。スケッチは巻末地図（6）右下に描かれていたが、見やすくするために図（74）に独立させた。この地図（6）に、私は本論文の雙生の考察に關係する北陸地方の諸地名の記号（アルファベットと算用数字）を加筆した。西澤氏によると、9月10日午前4時30分に能登半島の地図（6）K小木港を出港し、同日の午前10時0分地図（6）Z新潟港入港予定で航海中の「おぎかぜ」船上から、午前6時頃地図（6）の37°29'.7 N・137°50'.64 EのN地点で、佐渡島を図（74）の如く視認せられた。この時の印象を西澤氏に平成16年9月25日・10月13日にお尋ねしたところ、次の如くであつた。即ち、

佐渡の右側の方の島（小佐渡）の左下方には平坦な部分があるが、上方は大佐渡と同じ高さ・形で、量感も等しく、「双子」という印象を受けた。それから1時間、2時間と経過するに連れての変化を、その下方に描いた。両者が重なる頃まで「双子」の印象は持続した。重なりかかると、小佐渡が濃く、大佐渡が薄くなり、両者は別箇の印象となつた。二つの島が次第に重なつて行くから、佐渡島が一つになつた時刻は不明である。午前8時頃から9時頃に掛けてではなかつたろうか。

同じような景觀は佐渡島の北東沖でも得られる。私が新潟海上保安部に勤務していた昭和62（'87）年頃、當時無医村であつた新潟県の地図（6）2粟島に研修医達を乗せて航海していった際に、研修医が「佐渡島が二つに見える」と言つたので、私は、「間に国中平野があるから、二つに見えるのですよ。」と説明したことがある。

小佐渡は大佐渡よりも標高が低いが、地図(6)の小佐渡側の航路を取つたため両者が同じ大きさに見えたのであろう。参考に、前編(2)に引き続き森 永壽氏にカシミールでの計算上の画像を出力して頂いた。即ち、能登半島の東北端山伏山（地図(6)J。禄剛崎附近）から北東に40km進んだ、佐渡島と能登半島のほぼ中間地点海上（標高1m）からの図(75)（50ミリレンズ相当／人間の視覚に近い）によれば、高さは大佐渡の方が高く、幅は小佐渡の方が広い（両者の量感の差は不明）。さらに北東に向かって進んだ大佐渡の西南端相川（巻末地図(6)・本号17ペ因(5)O）から南西39kmの海上（標高1m）からは、図(76)（50ミリレンズ相当）の如くとなる。此処では、大佐渡の方が高く見えるが、幅は小佐渡の方が倍近くになるから、量感としては大佐渡に劣らないのではないかと推測される。肉眼によるものではないから、「双子」としての印象の有無は、明確に出来ないが、図(74)の実地体験も参考にすれば、その可能性を完全に否定することは困難と思う。少なくとも、A論文（75ペ上段17行目～18行目）で述べた「この島を東北及び南西から望めば、二個の島が狭い海峡を隔てて対峙している」景観は、西澤氏の体験とカシミールによる東北と南西側からの画像によれば得られるようである。但し、東北側から見たカシミールの図(77)（50ミリレンズ相当。新潟から68km）では、大佐渡が小佐渡よりも圧倒的に大きくなり、両者の海峡も相当広い。図(75)(76)(78)の大佐渡小佐渡間の海峡もかなり広い。従つて、東北側・南西側共に大佐渡寄りになるに連れて大佐渡の方が量感を増し、両者の間隔も遠方になる程広がるものと推測される。従つて、東北・南西沖の海上のどこからでも双子の景観が得られるとは断言できないのではないかと推測する。

本土からの佐渡島の肉眼による景観のデータが得られないため、カシミールの画像を参考にすると、能登半島東北端の地図(6)J山伏山（標高185m）からは図(78)（50ミリレンズ相当）となる。大佐渡の方が高いが、幅は小佐渡の方が広い。画面上では大佐渡の量感が勝るかのようだが、肉眼での印象は不明である。山伏山の南方の珠洲市三崎出身の花棚靖（はなだな

男氏（海上保安庁金沢海上保安部管理課長）のご教示（平成16〈02〉年8月23日）によれば、

珠洲の崎からは、余程上天気の時、年に1度位しか佐渡島は見えない。富山県の立山は夏でも冬でも見える機会が多く、「立山が見えると明日は雨が降る」という言い習わしがある。

とのことであるから、「双子」の景観は、能登半島佐渡島間の海上交通での機会で得られた可能性が最も大きいのではないかと思う。但し、西澤哲也氏の次の観察によれば、同じ右の航路上でもその時の気象条件によって印象が異なるから、隠岐島の場合と同じく、常時得られるとは限らないことが判る。即ち、

平成16〈04〉年10月12日、地図(6)と同じ航路で、逆方向にZ新潟港から能登半島のK小木港に向かう途中佐渡が見えた。視界は良く、小佐渡が明瞭に見えただれども、大佐渡は霞み、非常に見えにくかった。（平成16年10月13日ご教示）

(3) 「雙生」に関するA論文私説の修正

以上により、億岐と佐度が共に「双子」の景観を呈するというA論文の私説は、隠岐島についてはほとんど、佐渡島については概ね妥当と思われる。しかし、A論文での「與」の字に基く「雙生」の解釈は、訂正する必要があると考える。

即ち、A論文では、萩野由之の「億岐島も雙子。佐度洲も雙子と云は。二國孰も二島つゝ、海中に對峙するを以てなり。」（飯田武郷〈5922..112〉）という説に、私は実地理からではなく、景観という観点から賛成了した。萩野は郷里佐渡島の諸所での景観の印象から狭門と雙生についての解釈を思つていて。即ち、「今も加茂湖。若三崎地方の海に泛ぶ時は南北分斷して、海水横割するか如し。今村落田疇相連りてさへ。此觀あり。」（同113ペ）には、萩野説の発端となつた印象が伺われる。萩野の左の「與」に対する考察には、この自説にとつて有利に解釈しよ

うとした心理が働いたのではないか。即ち、

與は增韻曰。及也。易説卦。是以立三天之道。曰。陰及陽。立地之道。曰。柔與剛。立三人之道。曰。仁與義。論語曰。弑父與君。などの與と同格にて。雙生を兩方へかけて意味を有たせたるものなり。(同¹¹²べ)

しかし、右の用例は、単に「と」(及)の意で用いられているものと解されるから、「與」に億岐と佐度とを、それぞれに(雙生した)の意味まで込められていると積極的に断言できるのか疑問に思う。中村啓信(1988)に基き、「日本書紀」の「與」字を全部検討したが、これに確實に該当すると思われる用例は見なかつた。坂本太郎ほか(1967:85)が、この萩野説を「これは文章から推して適當とは思われない」とするには、そのためであろうか。小島憲之ほか(1994:27)は、「億岐洲(隱岐島)と佐度洲(佐渡島)とで双子。共に日本海に浮ぶので、そうみなした。」とする。これも、萩野説を念頭に置いているのかもしれない。

本研究を大妻女子大学国文学会(平成14⁽²⁾年7月6日)に於て発表した際、本学高橋均氏(漢文學担当)から次の趣旨のご教示を頂いた。

この「與」の字は、「と」と(AとB)ということで動きようがないと思う。ただそれが、「二つの島で双子になるのか、それぞれが双子になるのか、「與」だけでは解決できないのではないか。

手掛りがあるとすれば、むしろ副詞の「雙」の方ではないかと思う。

『日本書紀』の「雙」の用例を前編(一)第1章冒頭(6ペ段6行目~27行目)に掲げた。9例のうち1~8は、1 陵・2 秋葱・3 楠・4 5 墓・6 家・7 日・8 星が、それぞれ「二つ並ぶ」(1・3・4・5・6・7)、二重である(2)、並行する(8)の意で、億岐と佐度とで「二つ」のか、それぞれで「二つ」なのか、「雙」字だけでは決定できない。

「與」と共に使用されているのが、8の「有レ星、字于中央。與ニ星、雙而行之。」の一例である。この場合、各々の星の数については

特に記さず、二つの星群が同時平行で進んでいるとしているため、決定的な解決とはならない。「大碓皇子・小碓尊、一日同胞而雙生。」(景行二年三月(三日))は、国生み神話以外の「雙生」の唯一の例である。これは一人の親からの双子である。

結局、「雙」字からも有力な根拠は得られなかつた。神話を合理的に解釈し過ぎるのは問題であるが、この場合の「紀」本文の「始起」大八洲國之號焉。」、「一書第一の「由此謂之大八洲國矣。」からは、「八」を実数とみなし、二神から生まれた代表的な8島を選び、本文(書)ではそれ以外の島々を「潮沫凝成者矣」として、これと区別する態度が伺われる。一書第一が大八洲國の起原を説き、8島(億岐・三子洲を1島として数えている)を挙げ、それ以外の島を記さないのは、より大八洲國の起原に重点を置いた態度であろう。一書第六・第七・第八・第九には、大八洲國の起原を説く文言はないが、第六・第八の億岐・佐度の「雙生」を2島と数えれば、總て8島で一致する。従つて、『紀』本文の「雙生」も億岐・佐度各1島で双子(計8島)と理解すべきと考える。淡路洲を胞とする(本文、一書第六・第九)のは、大阪湾の真近かに浮ぶこの島を8島に数えない場合の配慮であり、大八洲の「八」を実数と解してこれにこだわった結果である。

以上により、『紀』の「雙生」は、少なくとも編集者の次元では、「億岐と佐度とで双子」と理解していたものと考へる。従つて、A論文で私が「世人或有雙生者、象レ此也。」の「象レ此也。」は双子として眺められる現実の情景を踏まえた文章と解し得る。」(80ペ段16行目~17行目)と述べたのは、撤回する。しかし、「両者が双子としての景観を持っているからこそ、遙かに離れた両島が「雙生億岐洲與佐度洲」。」と相並んで登場したのである。」は、変更しない。隱岐佐渡間は約450km離れており、両者を双子として実感するのは、地図上でも困難であろう。越洲の「洲」は明らかに島嶼の意で用いられているから、同じ日本海(当時そのような地理的概念があつたか否か問題ではあるが)に浮ぶ島として

双子に選ぶのならば、越洲（本文、一書第一・第六・第八）と佐度洲（本文、一書第一・第六・第七・第八・第九）とで対とする方がより自然であろう。

従つて、億岐と佐度それぞれの双子の景観について何らかの知識が朝廷に（漠然と）伝わつており、億岐三子洲で隱岐全体を指すとした（一書第一・第九）のと同じような地理的認識不足によつて、「億岐と佐度とで双子」とする伝が生まれたものと思つ。結局、『紀』本文の「世人或有雙生者、象レ此也。」も、記述者の両島間の距離に対する知識不足を示すものであろう。

注

- (1) 飯田武郷（1922：112～113）所引萩野説による。萩野説の原典について萩野と同郷（佐渡島）の風 義人氏より諸資料と共にご教示に預かつたが、以下とのところ測及できない。萩野を編集顧問とする佐渡郡役所（1973：12～13）は、飯田武郷（1922：112～113）から萩野説の同文を引用している。飯田『通釈』の本文は明治25（1892）刊（吉川弘文館『国史大辞典』第11巻）であるが、本論文では架蔵本の飯田（1922）を使用した。
- (2) 第2章第11節（前編）7～8頁）の結果によれば、島取県陸上から「双子」として最も良く見える確率が高い場所は、西部の名和町から中山町にかけての隱岐に向かつて突出する限定された地域になると思われる。しかし、此処からでも島後は島前よりも遠く（両島の中心部で測り、島後の方が約7km沖合となる）、且つ島前と島後の間隔が広い（最短距離で11km、中心間で約30km）から、本文第10章に記述した、航海中に長時間持続的に見ることのできる明確で迫力のある「双子」の景観と同じ印象が得られるか、疑問である。
- (3) 従つて、A論文の右の引用のように「海峡（ト）」（75～下段5行目）という印象が得られるか否かは、以上の考察だけでは断言できない。西澤哲也氏の図（74）の如く、両者の間隔は角度によつて変化するから、狭く感ずる地点（図（74）の下方の図）もあれば、広く感ずる地点（例えば、カシミールの図（75））もあるのではないか。従つて、A論文で私が、

佐度の名は実際の地形から起つたのではなく、海上或は本土から遠望したものと考えるのである。（75～下段4行目～6行目）

と述べたのも、再考の必要が生ずるかもしれない。その点で、A論文原稿の執筆時（昭和43（68）年夏頃か）に、新潟原出身の中川成夫氏（立教大学、考古学担当）が、右の私見に対し、「大佐渡と小佐渡の間に湯がクリーク状に残つていた地形に起因する可能性も考慮する必要があるのではないか。」とご教示くださつた（立教大学考古学研究室）ことを想起する。

(4) 卷末「附説（1）佐渡島と能登越後間の古代海上交通」参照。

(5) 『正字通』（96、国際文化出版公司）「與」の項に「黨與施與又及也許也又待也（後略、服部）」とある。諸橋大漢和、「與」の項の四には「と。および。これとかれど。〔禮、檀弓上〕聖人之葬人、與三人之葬聖人也。〔注〕與、及也。」とある。

『採韻字訣』（含「補遺」）「與」の項には、この場合の参考となる解説はない。河北景権（1786『助音韻』：78「與」の項では、『說文』の「黨與也」に基いて「黨與ノ義ヨリトモニト訓ズサレバクミアフ處ヲ主トシタル字ナリ（中略、服部）與ト共トノ分ハ與ハクミニアフ處ヲ主トシ云ヘバツキアハシテ云字也共ハヒトツニシテ云字也（中略、服部）立ツ人之道「仁與」ノ義ノ如キ此タゞ物ヲ並べテ云ヘルニ非ス二物ヲツキアハシテ云ヘル意（中略、服部）又用一法輕キ處アリタゞソレントソレト、云ヤウニ輕キユエ組合ト云ホドマテナクタダ於ノ字ノ如ク聞フルアリ」と説明する。

愛知大学（1988：2296）『中日大辭典』「与・與」の項の⑧に「…と（接続詞）〔中國（日本）中國と日本〕。牛島德次（1971：265～266）に「修飾関係の場合と同じく、並列関係の句も連詞を用いることが多く、この期の資料においては「與・及・並」等の詞が用いられている。與例…「太祖問群下可伐與不。」（魏14～10b）〔中略、服部〕類例…「…（中略、服部）今則足下與陸子也。」（呂1515a）「建初二年、后與女弟」（後略、服部）」（後10上、8a）〔前略、服部〕不知有功德與無也。」（世p.5～1）「元祐問曰・君與僕有何親？」（世p.33～1）

これらの解説による限りでは、萩野由之の「億岐と佐度とをそれぞれに（雙生した）」という説の積極的な傍証は見当らないよう思う。以上の「與」字に關して嵐 義人氏・高橋 均氏より、諸資料を頂き、ご教示を賜った。記して感謝申し上げる。

(6) 萩野説とは明記しないが、「佐渡島は大佐渡・小佐渡に分れるので、もとは両者が分離していたから、双生というとする説がある。」に統く。

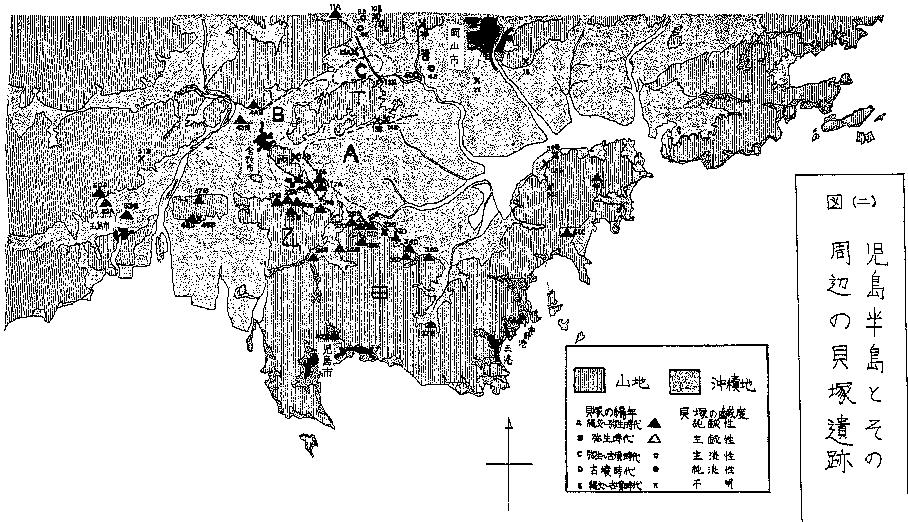
(7) 卷末「附説(2) 越洲能登半島説（A論文）の再検討」参照。

十三 終りに——隱伎之三子嶋（億岐三子洲）・「雙生」の大和朝廷への伝承経路

まず、「記・紀」共に隱伎之三子嶋・億岐三子洲とあるから、其を通ずる原資料があつたのであろう。「記・紀」の編集者或いは筆録者はこれに拠つて記載し、隱岐島が4島から成るという実地理を知らず、また確認も行なわなかつたのであろう。天之忍許呂別は、「記」独自の「島々の人体化」に当たり、島前の景觀或いは地形についての伝聞に基き作成したものと考える。天比登都柱（伊伎嶋）・天之狹手依比賣（津嶋）・大野手比賣（小豆嶋）・天一根（女嶋）・天之忍男（知訶嶋）・天兩屋（兩兒嶋）も同様であろう。

「紀」の「雙生」については、隱岐島と佐渡島が海上から（或いはごく稀に本土から？）「双子」に見える景觀が原点にあり、これについての漠然とした情報もしくは誤った理解を基に、原資料の作成者が「億岐と佐度とで双子」の意味で記したものと思う。「雙生」は、三子嶋（洲）を載せる伝ではなく、両者は重複しない。^①これについて辰巳和弘氏は、^②両者の情報源が別であることを示すものではないか、とせられる。しかし、私は原資料の作成者が、両者が共に景觀に起原していることを理解出来ず、「三子と双子とは整合しない」と考え、原資料を2系統に整理した結果が今見る形に伝わっていると考える。この原資料から、『記』は「三子」の系統を採用し、『紀』は「雙生」の系統を採用した

図(ウ) 『中央大学国文』12号服部論文掲載図
岡山県児島半島・周辺貝塚遺跡分布



服部 旦「続『國生み神話』批判」『中央大学国文』12号71頁（中央大学国文学会、昭和43年10月）より

ということになるのではないかと思う。⁽³⁾

『紀』の原資料作成者・編集者・筆録者の地理的認識不足による記載としては、「越洲」があると思う。その実体については、これが佐度洲と共に列挙されている（本文、一書第一・六・八）ことも、諸氏が解釈に難渋する原因となっている。即ち、小島憲之ほか（1994：31）の、

北陸道をさすが、令制の北陸道から若狭を除いた越前以東の地域であろう。コシの国は数多^(あま)た地を越して行く印象から、北陸道を特立させて越洲をシマとよぶ。あるいは淡海（琵琶湖）の北方に当るのでシマともいう。

先述（12頁下段27行目）の如く、越洲の「洲」は大八洲國の他の洲々と同じく島嶼の意味であるから、此處だけそのような説明で解決できるとは思われない。A論文では、邑知潟地溝帯の低地により能登半島が海上から見ると分離しているように見える景観に基くものと考えた（A論文67頁下段7行目～69頁上段23行目・70頁下段注⁽²⁴⁾）けれども、本論文巻末「附説⁽²⁾」に於て再考した。その結果、本章に述べる如く、奈良時代陸続きになっていた児島半島を万葉人が、「吉備乃兒嶋」と呼んだのと同じく、本土から長大に突出する能登半島を周航する際、或いは北陸道諸国の陸上から海を隔てて望見した際の景観に起原する可能性が最も大きいものと考えるに至った。『記・紀』の諸伝は、越洲を含むもの（『紀』本文・一書第一・第六・第八）と含まないもの（『記』・『紀』一書第七・第九）とに分れるが、これも、越洲を実際の島と認めるか否かの判断の差により、原資料に対し整理が加えられた結果ではなかろうか。

吉備兒嶋（『記』）吉備子洲（一書第一・第八・第九）に関しては、図⁽⁴⁾の如く、弥生時代児島半島は全体的にほぼ島の形態を呈していた。しかし弥生～古墳時代本土に最も近い部分は海水により分離していた可能性は小さい（A論文72頁上段7行目～14行目）から、奈良時代には陸続きになっていたと思われる。即ち、児島の位置する瀬戸内海に面した半島先端部の山塊は、A論文71頁の貝塚遺跡の分布図（即ち本号図⁽⁵⁾）

からすると、奈良時代以前から北に接する山地と陸続きになっていた

ものと推測される。『万葉集』^{967番}（旧）歌で大伴旅人が「日本道乃吉備乃兒嶋乎過而行者筑紫乃子嶋所念香裳（佐竹昭広ほか〈1974：144〉と詠んだのも、海上交通に於て児島半島が島として見えたことによる呼称を踏まえてのことと思われる。同じ瀬戸内海航路で柿本人麿は、「自明石門倭嶋所見」と、明石海峡の彼方に浮かぶ大和地方の山々を「倭嶋」と詠んでいる。

隱岐之三子嶋（億岐三子洲）の地名も、主に島前に對する海上交通から自然発生的に生まれたもので、これが大和と隱岐島を往来する人々によつて伝えられ、『記・紀』の原資料に登録されたのである。億岐と佐度の「雙生」（・越洲・吉備之兒嶋（吉備子洲）も同様の経路で朝廷に齋されたものと思う。右の万葉歌を参考にすると、その「人々」とは大和朝廷の官人が中心ではなかつたろうか。

次田潤（1963：41）は、

児島小豆島姫島知訶島等は、萬葉歌人にも親しみのある地名で、防人や遣唐使が寄泊した處であるが、就中知訶島は、遣唐使の船が薪水を貯へる爲に、必ず寄港した所で、こゝから直ちに大海に乗り出して唐に渡つたのであるから、こゝに其の地名が見えてゐるのは、此神話が海外との交通の頻繁に行はれた、稍後世の思想を混じてゐる事を、證明するものであると言つてよからうと思ふ。とする。知訶嶋は『肥前國風土記』に見え、太宰府官人を経由した知識が入る可能性もあると思うが、次の兩兒嶋と併せれば、次田説は恐らく妥當であろうと思われる。」とする。これらに拠つてであろう、荻原千鶴（1998：94・97）は、「記」のこの島を含む6島を、遣唐使の「南路の開発によつて創作されたもの」と考え、「天丼屋」も航路上の景観に基づいたもの」と推測している。兩兒嶋が男女群島であれば、岡村廣法氏（長崎県在住）より、「此處は波荒い絶海の孤島とも言つべき島」で、五島列島から貸釣船でごく天候条件の良い時にしか到達出来ない⁽⁵⁾。」

と伺い、現地調査を諦めた場所である。従つて、この島名の伝来と亦名が創作される情報源としては、私も遣唐使の可能性が最も大きいと思う。

以上により、天之忍許呂別も、島前に渡つた際の官人を中心とする人々の印象（の伝聞（資料））を参考に、「記」の編集者が創作したものと思う。国生み神話の島々全体の配列には明確な地理的認識が反映しているとは思われないから、各地を往来した官人を中心とする人々の経験や伝聞を含めた知識を一旦文献として集積した原資料から、地図で確認することもなく、「記」・「紀」各々独自の立場で編纂したものと考えられる。

注

(1) 「紀」一書第七は、「雙生」ではなく単独で「億岐洲」と記す。この名称

は、三子嶋（洲）が島前を指す名称であったのに対し、島前と島後を含めた総称^{*}であつた可能性があると思う。叙上の研究により、「記・紀」の編纂者は、兩者の違いを十分に理解していなかつたと思われる。今日の島根県人は、総称の場合「隱岐」・「隱岐島」（稀に「隱岐の國」）を使用し、区別する際には、「島前」・「島後」と呼ぶ。

* 隱岐が大きく2島から成るという認識が、それでも、「紀」の編

纂者或いは原資料作成者にあつたか問題である。吉川弘文館「国史大辞典」第11巻「日本圖」の項によると、現存最古の日本全國

として伝わる「拾芥抄」所載の「大日本國圖」（いわゆる行基図、「國の源流が平安時代の官序保管の大型行政用日本圖があつたことは疑いない」とする）では、隱岐国は、1島（「隱岐四郡」と記す）として描かれ、これを踏襲した「日本圖」（16世紀末、福井市淨得寺所蔵）も、1島として描いている。「幕府撰慶良日本繪圖」承応2（1653年頃）に至ると、島前島後の4島を描くが、島後を島前の真上に配している。

** 平成12（00）年8月9日松江市寺町の、「おさと旅館」主人田中里

子氏（天正15（26）年生）から「隱岐の國」に行きて来られましたか。」と声を掛けられたため、この呼称が印象に残っている。

(2) 平成14（02）年12月26日、日本書紀研究会（京都）で本論文の骨子を口頭発表した際の質疑中のご意見。

(3) 国生み神話の島名の用字が隱岐と億岐を始めとして「記・紀」の間で多數相違しているところから見ても、「記」が2系統の内の一方のみを忠実に伝えているとは考え難い。即ち、亦名・人体化・大八嶋の内容・大八嶋以外の島々の列举等、明らかに「記」独自の立場での編纂が行なわれている。一方、「紀」にも島名の用字に本文・一書を通じた統一性が見られるから、現在の「紀」の諸伝も原資料を忠実に伝えているものか問題だと思う。

(4) 昭和54（79）年3月ご教示。岡村廣法氏の「肥前國風土記における『烽』の研究」（『古代文化』232号、古代学協会 昭和53（78）年5月、京都）を拝読しお目に掛かりたかったが、果せなかつた。

(5) 「日本書紀」大化2（646）年8月14日の詔 天武10（691）年8月11日、同13（694）年閏4月11日の記事に諸國の「圖」が作成されたことを記すが、當時日本全國が果して存在したであろうか。大和朝廷の版図を収めた地図が存在したとしても、朝廷内で一般官人が閲覧することは困難ではなかつたろうか。

附 説 (1) 佐渡島と能登越後間の古代海上交通

「延喜式」（新訂増補国史大系本。以下同じ）主計上（巻24）、北陸道の海路の日数は、越前国 6日 加賀国 8日 能登国 27日 越後国 36日 佐渡国 49日である。能登国と越中国が同日数であるのは、両国の国府が接近しているためであるが、越後国と佐渡国間に13日もある、1島として描いている。「幕府撰慶良日本繪圖」承応2（1653）年の差がある。田中圭一（1975：47）は

この日数をみて気づくことがある。それは、加賀国から能登国に二十日間の日数をみてることである。そのころ能登の国府はいまの七尾市にあつた。それをみると能登半島を迂回するという

航海が、いまわれわれが考えるのとは段ちがいにむずかしかつた

ことを物語るものである。つぎに留意しておきたいことは、能登

半島から、越後や佐渡へ直線的に航行するという航路は、平安時

代前期には存在しなかつたことである。もし、能登半島から一息

に越後へわたることが可能であつたならば、能登から佐渡への航

海も不可能なはずではなく、このころの海路の距離がほぼ似たもの

であるいじょう、渡りに要する日数もほとんどおなじでよいはず

である。ところがじつさいは、十三日と大きな差が記録されてい

るのである。

佐渡にくる船はやはり越後の寺泊（巻末地図（6）X：服部）まで

きて、そこから越佐海峡を横断して佐渡にいたつたのであろう。

とする。

右の航路を知る手掛りとして、同じ『延喜式』主税上（巻26）、諸国

運漕雜物功賃の海路の注記がある。摘要すると、

越前国 比栗湊→敦賀津、挟杪40束・水手20束

能登国 加嶋津→敦賀津、挟杪70束・水手30束

越中国 曰理湊→敦賀津、挟杪70束・水手30束

越後国 蒲原津→敦賀津、挟杪75束・水手45束

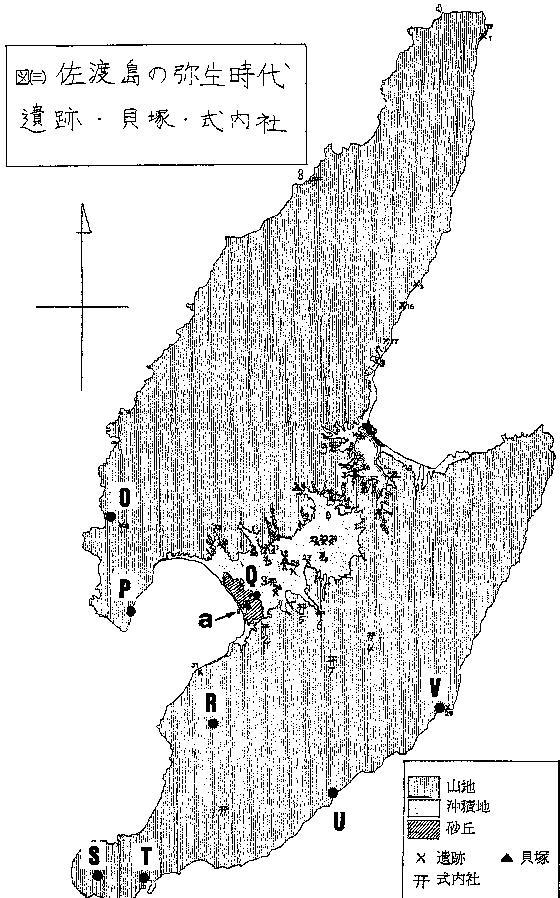
佐渡国 国津→敦賀津、挟杪85束・水手50束

である。

敦賀津の位置について、千田 稔（1974：111～116）は断案を示さず、

現在の氣比神社を「畿内との交通的位置を考慮する場合には興味深い

図(工) 『中央大学国文』12号服部論文掲載図
佐渡島の諸地名・遺跡



a 國府川(川口) O 相川 P 二見 Q 若宮遺跡 R 「砂金山」
S 長者ヶ平遺跡 T 小木港 U 赤 泊 V 松ヶ崎

服部 旦「統『国生み神話』批判」『中央大学国文』12号74頁
(中央大学国文学会、昭和43年10月) に加筆

位置を占めているといえる。」として、その附近を可能性の一つと考えているようである。孰れにせよ、敦賀湾奥の何處かであろう。比楽湊を千田 稔（1974：116～118）は、手取川河口部の美川町平加（地図⁽⁶⁾B）を遺称地とし、加嶋津を現在の七尾市の七尾港（地図⁽⁶⁾L）附近に想定する（同120ペ）。曰理湊についても諸説あるが、千田氏は射水川河口部の伏木港（地図⁽⁶⁾M）附近に想定し（同123ペ）、蒲原津を信濃川河口の新潟市蒲原（地図⁽⁶⁾Z附近）に想定する（同124ペ）。

問題の佐渡国津については、現在決定的に立証されるまでには至っていない。佐渡国府自体も、中心をなす官衙遺跡は目下未出土である。発掘調査により真野町大字四日町字若宮（地図⁽⁶⁾Q附近）の若宮遺跡（真野町教育委員会〈1968〉・〈1969〉）が有力地の一つである。田中・山本（1967：8～10）、今井・田中（1968：5）は、この若宮遺跡を『延喜式』以前の初期国衙と推測し、同町竹田地区内の字新國府を「第Ⅱ期の国衙址」即ち『延喜式』当時の国府と推測している。

本土・佐渡間の航路の資料としては、『延喜式』兵部省、諸国駅伝馬（巻28）が参考の一つとなる（ゴシック体は服部）。即ち、

越後國驛馬（宿海人足、鷲石、名立、水門、伊勢足、通音船二疋。）。
佐渡國驛馬（松崎、三川、雜太各五疋。）

今井・田中（1968：1）は、越後國渡戸を寺泊の川港（地図⁽⁶⁾X）、佐渡国松崎を畠野町松ヶ崎（地図⁽⁶⁾Y）とする。この間が官員交通の常道で、

「渡戸」からは、小木半島（地図⁽⁶⁾图⁽²⁾S：服部）を経由して真野湾（地図⁽⁶⁾图⁽²⁾P：服部）に入る航海が、海流の関係で極めて難しいこと、一つは遠路の海上交通を嫌つたからであろう。このことは、近世に於ても、物資輸送がそれを直接費消する相川（地図⁽⁶⁾图⁽²⁾O：服部）に直送されたのに対し、奉行官員が、続々と松崎に渡つてゐるのと同様の事情であり、専ら本州側の渡海地点に規制されるものであつた。（同1ペ）

とする。一方、一方、

だからといって、佐渡からの物産が松崎から越後へ運び出されたとは考へることは出来ない。何故なら松崎は越後渡戸に対してはもつとも近い距離にあり航路上安全である。けれども敦賀津（地図⁽⁶⁾A：服部）に対しては何ら特別の利点をもつ港ではない。まして松崎港は佐渡の生産地帯からは、険しい山を越えて四里のところにある。だから官員以外の物資輸送に關する国府の湊は国府の近くにある。だからそれは真野湾内、国府（こう）川（地図⁽⁶⁾a：服部）の沿岸に求めるべきであろうと思ふのである。この場合私はその港湾都市の中心として真野町四日町の砂丘地帯（地図⁽⁶⁾Q附近：服部）を考えたい。（中略、服部）遺物についても弥生中期以来の遺物が出土し（中略、服部）、この砂丘の対岸、金丸地内には近世まで菱地（ひしろじ）という径一キロにも及ぶ池があり、（中略、服部）四日町川端遺跡からばかりかめの中に唐錢、宋錢（マサニ）が多量に発見され又平安期の町を示す井戸わくが多数発掘されていて、この地帯に町割があつたことを思わせる。（中略、服部）真野町四日町の上遺跡からは開元通宝・景德元宝・天禧通宝・皇宋通宝・元宝通宝・元祐通宝・紹聖元宝・政和通宝などの中国の古錢が出（中略、服部）平安期の港湾都市の存在が予定出来（中略、服部）四日町砂丘地は中世に於ても港の中核をなす場所であつた。（同1ペ～3ペ）

とする。一方、今井・田中（1968：1）では、この引用文の直前に続き、「國府が國中平野にあるのに、國津が辺縁の松崎にあるのは、越後國津『渡戸』からは、小木半島を経由して：」（傍点は服部）と松崎に「國津」の語を用いており、矛盾するかの如くである。國津の語について千田 稔（1974：76）は、「嚴密には國ごとに指定された港を國津といったかどうかは疑わしい。（中略、服部）佐渡國の場合のみ積出し港として國津という名が『延喜式』にみえ、これを固有名詞とみなさず指定港的な一般名と見るならば、（中略、服部）私も本書では便宜上國津」ということばを用いてゐることにしている。」とし、諸氏も便宜的な用語と

して用いている。その場合でも、「主税式」の越後国の「国津」は蒲原津となるであろうから、今井・田中（1963：1）が渡戸を越後「国津」と記すのは疑問である。結局、今井・田中（1968：2）の松崎（駅）（地図⑥図五V：服部）、は「敦賀津（地図⑥A：服部）に對しては何ら特別の利点をもつ港ではない。」の一文から察すると、「主税式」佐渡国國津を両氏は真野町四日町の国府川（図五a附近）沿岸に比定しているものと考えられる。千田（1974：127）は、この推定を「国衙付属の倉庫等が四日町の砂丘地帯から発掘されれば港としての性格は明確となるのであるが、今までのところそのような確証はない。」としつとも「十分首肯されるようである。」と支持している。敦賀津に対する利点を考慮して、国津を国府川沿岸に比定する今井・田中説は、佐渡島と能登半島の直行経路を想定しているものと解し得る。

しかし、今井・田中（1968）よりも後の発表である田中圭一（1975：49～50）では国津を松崎駅と同一地に比定している如くである。即ち、

越後の国と佐渡の国との渡りには、

かじとり

十束

水手

五束

の功質が書かれている。ここでは、かじとりがむずかしいとみてよいだろう。しかも十束という数字がけつして小さいものではないことは、ほかの例とくらべれば簡単にうなづけるところである。

また、佐渡の国と陸路の日数は、のぼり四十四日、くだり十七日となつていて越後の国とおなじ日数である（『和名抄』卷5「國郡」：服部）が、功質（右の「主税式」上：服部）の稻は越後国が百五束であるのに、佐渡は百八束と三束多くなっている。この三束の差は、一日の行程である。それは、雜太駅（『和名抄』卷5、雜太郡に「國府」と記す：服部）から三川を通り、松崎駅におくれられる山越えの功質であることはまちがいない。このことは、旅行者が雜太を朝出て夕方には松ヶ崎についたことをあらわしていると考えられ

としている。ここでは「主税式」に見る佐渡国國津については明言しないが、先の（田中〔1975：47〕）の引用と照し合わせると、田中圭一氏は「兵部式」の松崎駅と同一地と見なしているものと解される。これまでの引用の「國津が辺縁の松崎にある」（今井・田中〔1968：1〕）には田中氏の意見が反映されているのであろうか。後の田中（1975：47）に於て、「佐渡に入る船はやはり越後の寺泊まできて、そこから越佐海峡を横断して佐渡にいたつたのである。」（傍点は服部）とするのは、國府川沿岸説を変更したか、今井・田中（1968）の当初より田中氏は松崎説を腹案としていたのではないかと推測される。

私説としては、国津松崎説に對して賛同する。即ち、『延喜式』（摘要）によれば、

〔主計上〕

越後國<sub>行目上卅四日。
下七日。</sub>

海路卅六日

佐渡國<sub>行目上卅四日。
下七日。</sub>

海路卅九日

〔主税上〕

越後國陸路<sub>百五
束。</sub>

佐渡國<sub>行目上卅四日。
下七日。</sub>

とある。百五束と百八束の3束の差は、佐渡国内での路程（3駅間1日）による差とする田中氏の説は首肯できるとしても、海路の大差を無視することはできない。卅に誤りないことを前提とすれば、海路での帰路の場合越後國府到着の13日後に漸く佐渡國府に到着することになる。

これは、渡戸・松崎間の越佐海峡渡海の天候待ちを見込んだとしても、猶差があり過ぎる感がするから、先（本号17ペ下段7行目～8行目）の越後國水手45束と佐渡國水手50束の差5束を重視すれば、「海路卅九日」の誤りで、この場合佐渡の國津は、やはり田中氏の如く、松ヶ崎を探るべきではなかろうか。

『延喜式』の記載に拠る限りでは、佐渡國府から山越えで松ヶ崎に運び、松ヶ崎から寺泊に渡り、本土の沿岸伝いに敦賀津に至ったと解さ

れる。この航路をとった場合、佐渡国・越後国の沿岸からは、地図⁽⁶⁾・図⁽⁷⁾の如き佐渡島の「双子」の景観が得られる可能性はないと思う。しかし、これはあくまで『延喜式』上での貢納のための公式航路を示すもので、これをもつて田中（1975：47）の如く「能登半島から一息に越後や佐渡へ直線的に航行する」という航路は、平安時代前期には存在しなかつた（傍点は服部）とまで断定することは贅成できない。

より古い時代の具体的な航路を示す直接的な史料は乏しいが、披見できた限りでの考古学的文献を参考にすると、佐渡島への渡海航路は渡戸（寺泊か）松崎（松ヶ崎か）間のみに限定されたものではなく目的地や天候、用向き等諸条件により、様々であつたと推測される（後世の事例であるが、川田貞夫〈1979：33・331・335〉によれば、佐渡奉行の川路聖謨の渡海も、往路（寺泊→赤泊）と帰路（小木湊→出雲崎）とでは異なっている）。例えば、佐渡島の長者ヶ平遺跡（地図⁽⁶⁾図⁽⁷⁾S附近）は、高橋保ほか（2002：136）によれば、小木半島の最も高い地点に绳文時代前期末から後期の初めにかけて、千年に亘つて営まれた佐渡島では最大、新潟県内でも有数の遺跡である。此処には、北陸はもとより、東北・越後・長野・関東からの土器が集まっている。「その一因として、能登半島をはじめとした日本海交通の要衝」ということが言えるのではないか」とし、小林・青木（1983：29）は、「縄文時代の海上交通が我々の予想以上に発達していたことが考えられる」（池田晃一氏担当分）とする。小木湊は北前船以前から、佐渡島の重要な港であったものと思われる。

佐渡と越後・能登間の出土土器の考古学的様相について高橋 保ほか（2002：40～48）が時期ごとに对比研究をしている。これを要約すると次の如くである。

弥生時代末（2世紀後半～3世紀前半）

金井町千種遺跡（佐渡、図⁽⁵⁾×13：服部注）と長岡市横山遺跡（越後）と鹿西町徳前C遺跡（能登）との間で、非常によく似た土器が見られる。

古墳時代前期（4世紀）

真野町浜田遺跡（佐渡）と北蒲原郡聖籠町山三賀Ⅱ遺跡・西蒲原郡卷町南赤坂遺跡（越後）と押水町宿東山遺跡（能登）を比較すると、佐渡と能登および、越後の阿賀野川より南の海岸部とは非常によく似ており、越後の阿賀野川以北とではこれと異なった状況が見られる。

古墳時代後期・飛鳥時代（6・7世紀）

真野町大願寺遺跡・浜田遺跡・ケラマキ古墳（佐渡）と上越市一之口遺跡（越後）と羽咋市寺家遺跡（能登半島、地図⁽⁶⁾C・図⁽⁷⁾（本号228）ア付近：服部注）を比較すると、能登では6世紀には須恵器を作り始めるのにに対し、佐渡・越後では8世紀頃にならないと須恵器が作られないという差がある等、能登との関係が薄れ越後に近い様相が見られ、越後も含めた東北地方南部の影響が考えられる。

奈良時代・平安時代初め（8・9世紀）

真野町浜田遺跡・四日町上遺跡（佐渡）と上越市今池遺跡（越後）と羽咋市寺家遺跡（能登）を比較すると、8・9世紀の佐渡の土器は、基本的に独自の様相が見られるが、食器では越後よりも能登に近く、煮炊具は北陸とは異なり近畿地方により近い様相が見られる。

平安時代中頃（10世紀前半）

真野町仲畑遺跡・藤塚貝塚遺跡（佐渡）と三島郡和島村門新遺跡（越後）と羽咋市寺家遺跡（能登）を比較すると、9世紀同様佐渡に基本的に独自の様相がみられるが、越後よりも能登に近い要素が見られる。

以上を要するに、佐渡の古代土器は各時代を通じ、能登との関連が強く、近畿地方の影響も見られる。また、6・7世紀に限れば、能登とは異なる、越後・東北の影響も見られる、という。

能登から佐渡に至る航路は恐らく様々で、『延喜式』の駅路に近い本土伝いに越後に至り、越佐海峡を渡る航路もあつたであろう。寺村光晴（2001：104～106）によれば、越佐海峡とその附近の海底より土器が

引き揚げられている。「新潟県西蒲原郡間瀬村（現岩室村。〈地図⁽⁶⁾Y・服部〉）沖合いのタラバ（東経二三八度四〇分・北緯三七度・寺村論文）から」揚陸された弥生式土器は、佐渡郡「千種遺跡（図^{(5)×19}：服部）」の甕形土器のB類に類似する。これらは大境水見洞窟第四層をはじめ、富山・福井県下における土器に同じものが認められるという。」寺村（2001：136～137）はその他の揚陸土器として、

新潟県粟島（本号地図⁽⁶⁾2：服部注）南東部海中、同角田浜・寺泊・出雲崎町沖、同名立町沖合の三か所がある。これらはいずれも水深一五〇～二〇〇mの陸棚の縁辺にあたり、ここから急に深さ四〇〇m以上の深海になるところである。揚陸された遺物は須恵器、須惠質土器が最も多く、千種式土器（右引用文中のと同一物か：服部注）、石錘もみられる。器種は甕・壺・摺鉢・横瓶・盤・片口鉢などで、高坏・埴などはまだ検出されていない。なかにはかなり精品に属し、櫛目波状文をもつ四耳壺や荒い叩目文のあるものがみられ、能登半島の珠洲焼そのものといえるものもあり、時代も鎌倉・室町時代に下降するものが含まれているようである。（傍点は服部）

とする。寺村（2001：137）は、これらについて大場磐雄氏の海神投供祭祀説を躊躇しつつ紹介しているが、土器の種類が様々で祭祀に限定されていないようだから、前編⁽²⁾22ペ下段2行目～14行目に記した、「海上がり」土器」と同類のものと思う。

能登半島北端の珠洲地方（地図⁽⁶⁾H附近）で焼かれた須恵器質の珠洲焼片および珠洲焼系土器片が佐渡島の各地で出土している。佐渡で焼かれたものとの区別が明確にできぬため、諸報告書では、「珠洲系」の用語を用いて慎重を期し、左の⁽⁶⁾のみが「珠洲焼」とする。これらは、甕・壺・摺鉢である。報告書刊行の年代順に記すと、次の如くである。

- ① 野崎城跡（畠野町教育委員会（1973））
② 吉住城址（両津市教育委員会（1982））

『古事記』隱伎之三子嶋の地名起源（三）（完）

- ③ 真木城址（両津市教育委員会（1983））
④ 羽茂城址（羽茂町教育委員会（1984））
⑤ 泉畑田遺跡（金井町教育委員会（1984））
⑥ 荒城遺跡（佐和田町教育委員会（1999））

これらの遺跡からは越前焼甕片も出土（②④⑥）している。その中には、越後を経由せずに能登半島から直接齎されたものもあり得ると思う。古代に能登佐渡間で直接の海上交通があり得たことを暗示するものとして『今昔物語集』の「能登國堀鐵者、行佐渡國堀金語第十五」（岩波書店日本古典文学大系25）がある。即ち、佐渡国に「金ノ花榮タル所」があるという話を聞きつけた能登国守に依頼された採鉄者の長が、「小舟一ツ」で渡海し、「其後廿日餘り一月許ヲ有テ」金を齎したとする（同趣の話として『宇治拾遺物語』（日本古典文学大系27）「佐渡國に有レ金事 卷四ノ二」がある）。

この佐渡の産金地を佐渡郡役所（1973：54⁸）は、近世の相川鉱山（地図⁽⁶⁾図^{(5)O}）以前の「西三川ノ砂金ナルヘルシ」とする。西三川村の笹川には「砂金山」（地図⁽⁶⁾図^{(5)R}）がある（国土地理院5万分1地形図「河原田」（大正2⁹：13年測図・昭和9¹³年修正測図・同28⁵³年応急修正）、昭和28年発行）から、全く架空の話ではなく、能登半島からの技術者の渡海の史的痕跡を示すものと思われる。即ち、田中圭一（1965：3～4）は、笛川村での砂金採取方法の実地調査により、大量の砂鉄と少量の砂金が同居する事実に基き、右の説話には、「能登の鉄掘りが佐渡の川で鉄を洗つていて同時に砂金の存在を知り得た」史的背景があつた推測する。

田中（1975：39～40）は、右の『今昔』・『宇治拾遺』の説話を引き、能登から佐渡までは小舟でほぼ一日の行程である。朝まだうす暗いころ、能登を出発すると、夜なかもうには佐渡の海岸につくことができるとき曾々木（地図⁽⁶⁾G：服部注）の海辺の人びとはいつていた。

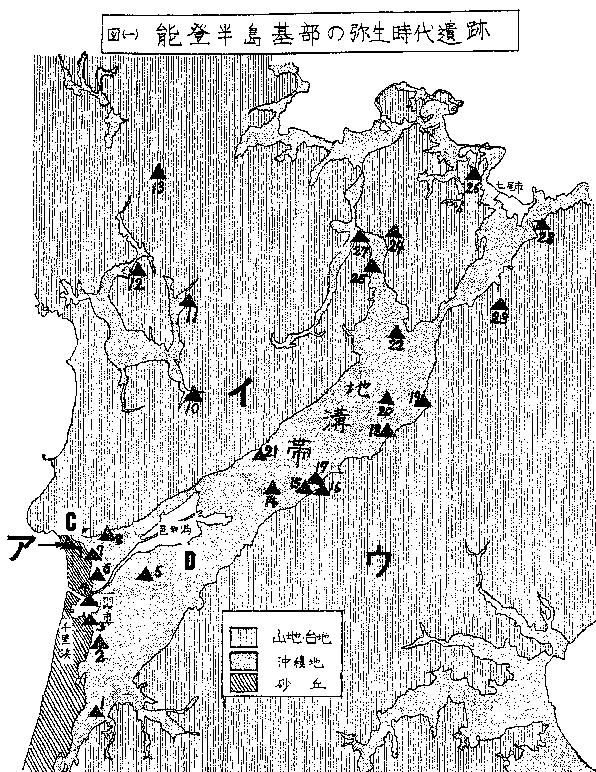
とする。右の引用文だけでは、現実の体験を記録したものか否か明確

でない。近世の帆船による例であるが、「海陸道順達日記」（佐藤利夫（1991：43～46・68～69））によると、百石積徳吉丸は文化10（1813）年4月21日朝、順風を得て真野湾口の「見（地図⑥図⑤P）」を出帆し、同日午後の「八ツ頃」（午後3時前）佐藤能登半島の尖端「能州塙津崎（折戸ばな）ともいふ：佐藤。地図⑥I）に達し、当日の夜は「能登黒嶋」（石川県門前町黒島：佐藤。地図⑥F）沖に泊し、翌2日は順風に恵まれず、途中櫓も使用して「七ツ時」（午後4時すぎ：佐藤）福浦（地図⑥E）に入港した。この場合、佐渡島西南端から約半日で能登半島北端沖に達したことが判る。「此徳吉丸も小船と申ながら、昼夜二凡四拾八、九りも艤せ可レ申と船人のかたられた」とあるから、帆を用い、順風を得れば相当の速力が出た模様である。右の田中（1975：40）の、「能登から佐

渡までは小舟ではほ一日の行程」という交通はあり得たことであろう。このように能登半島と佐渡島間を航海した際に、図⑦の如き「双子」（地図⑥図⑤T）に到着した。これは、地図⑥の巡視船「おきかぜ」の航路に近い。徳吉丸も15日の「昼過、佐渡山を久しうに見掛由候。（佐藤（1991：616））とする。

本附説をなすに当つては、佐渡博物館館長山本 仁氏・学芸員羽生令吉氏より多数の文献と共にご教示に預かり、郷土史家の山本修巳氏からご教示を賜つた。山本修巳氏をご紹介下さつた風 義人氏からも

図(才) 『中央大学国文』12号服部論文掲載図
石川県邑知潟地溝帯



ア寺家遺跡 イ眉丈山地 ウ碁石ヶ峰 C氣多神社 D邑知潟

服部 旦「続『国生み神話』批判」「中央大学国文」12号68頁
(中央大学国文学会、昭和43年10月)に加筆

文献と共に種々の教示を受けた。記して諸氏に篤く御礼申し上げる。

附 説 (2) 越洲能登半島説 (A論文) の再検討

越洲今のが能登國の事にて。羽咋海以北は一島なり。今は海潮乾て。加賀國に並ぶとあり。かたかた能登國を。古越洲と云りしこと明らげし。(同書115頁)

A論文に於て私は、飯田武郷(1922: 114)の越洲能登半島説を紹介した。飯田は、江戸時代の『能登国名勝志』が地元の神社に伝わる地方伝説(『氣多社古縁起』(石川県《1983: 35》に翻刻されている))は、同類のものと思われるに基き、A論文68頁図(即ち本論文図オ)の邑知潟地溝帯(本論文地図(6)D附近に邑知潟がある)が海水で分断された時代があつたと推測して、能登半島が「島國なりし古には。越洲と云けん事云も更なる物なり。」としたことに賛意を表した。A論文では引用しなかつたが、飯田は統けて内山真龍の説も引いて補強としている。即ち、

私は、この説に考古学と地理学の知見から、既に弥生時代には陸続きであったから反対し、代りに海上からの景観に基づくという私説を提示した。私説の論拠の幾つかは変更の必要を感じないが、一方見直しを必要とする点もある。即ち、A論文執筆時に私は邑知潟地溝帯の実地調査を行なつていなかつたため、平成16(04)年8月23日に訪れて、陸上から能登半島が邑知潟地溝帯によつて本土から分離しているように見えるか否かを諸所から観察した。当初予定していた羽咋市の海岸砂丘(標高7m~8m。図カアに続く「千里浜」)は低く、見通しが利かないことが判つたため、案内の谷村幸雄氏(邑知觀光タクシー)が最も



写真(4) 石川県邑知潟地溝帯 (地図 <6>・図 <オ>) パノラマ
邑知潟大橋中心より北方 (左端) から東方 (右端) を望む 中央が北東方向
地溝帯で能登半島 (左) と本土 (右) が分離している印象なし

可能性のある地点として選んだ、邑知潟（東西約3km・南北約250m）のほぼ中央（幅約250m）の南北に架かる邑知潟大橋の中心（頂点）から観察した。

邑知潟は、A論文68ペ因(一)即ち本論文図(才)の地図当時よりも干拓で約3分の1に縮小していた（以下、羽昨市〈1996.4.口絵〉参照）。本号の写真(4)は、邑知潟大橋から北東（七尾市方面）を臨んだパノラマである。視点が高いことと邑知潟の幅が狭いため、地溝帯の全体が水面で覆われて見えることはない。邑知潟が地平線に接する遠方は、標高が若干高まっているためであろう、極めて低い段状となる。また、橋の中心から見て左（北）側に眉丈山地（図才写真(4)イ、標高約100m～約180m）、右（東）側に碁石ヶ峰（図才写真(4)ウ、標高611.1m）に向かって続く山地（標高約140m～約200m）が見えるが、地図上で想像していた程には高く見えない。両山地は地溝帯に向かってなだらかに降りて来ており、地溝帯を挟んで断絶をなすような山容ではない。このことは図(7)のカシミール画像でも伺える。当日は曇天で約1時間後に雨が降り出したため、10km程度しか遠望が利かなかつたが、地溝帯の南北幅は約3km～4kmと狭まく、且つ南北の山地の標高が低（く、潟も小さ）いため、邑知潟並びに邑知潟地溝帯によって能登半島が本土側から分離して見える景觀は得られなかつた。また、橋から見て南西側の羽昨海岸平野の幅は最大で約8kmと一層広く、一方、北側の山地の標高は約70m～100m、南側の山地の標高は約80m～160mと、こちら側も低い。従つて邑知潟大橋の南西側も能登半島が本土と分離して見える景觀は全く得られなかつた。

邑知潟が今日よりも広かつた時代の印象はいかゞであつたろうかと、当日羽昨市歴史民俗資料館を訪問した。館長の谷内穎央氏のご意見は次の如くであった。

奈良平安時代の遺跡の分布からすると、その当時の邑知潟は昭和22年頃の米軍空中写真に見る姿（羽昨市〈1996.4.口絵〉）とほぼ同じであつたろう。潟の縁から、「大

町」と書いた平安時代の墨書き土器（皿）が出土している。邑知潟地溝帯は、太古の時代には七尾市付近まで海水が浸入していた（石川県羽昨市〈1996.4.口絵〉）が、近い奈良平安時代に邑知潟で分断され能登半島が島のように見えた可能性はないであろう。江戸時代の成立と思われる「気多社古縁起」（石川県〈1988.345〉）に、「孝元天皇御宇、北国越中之北嶋魔王化鳥而、害国土之人民不少」と「北嶋」という語が見える。この地名は現在残っていないが、そうした景観の観点から考えて見るのも、或いは面白いかもしれない。

続けて、A論文での海上からの景觀を起原とするという私説を再検討する。この私説は、「金沢図幅地質説明書」（佐藤伝藏）の次の見解に拠つていた。即ち、

遠ク之ヲ望メハ越山能地ハ全ク此地溝ノ爲ニ分離セラレ、能登半島ハ一ノ獨立セル陸島ノ如キ觀ヲ呈シ地溝帯ハ一ノ海峡ノ如キ形ヲ爲ス、往年獨逸ノ戰艦月明ニ乘シテ此擬海峡ヲ通過セントシリナク陸地ニ衝突シテ破壊セリト云フモ誠ニ宜ナリト云フヘシ。右の羽昨市の実地調査での私の印象によれば、邑知潟地溝帯を塞ぐ形で形成されている砂丘の標高は7m～8mであつたから、ドイツの戦艦の事故の原因が、果して、海峡と見誤つたことが總てであつたのか、氣掛りに思う。従つて、この事故が佐藤説の有力傍証となり得るか、慎重を要する。また、佐藤は、「遠ク之ヲ望メハ」とのみ記し、右の景觀の得られる地点を明記していない。海上からとも陸上からも受け取れる。陸上からの可能性は、右により小さいと思うから、あり得るとすれば、海上からの可能性の方が大きいと思われる。

そこで、平成16（04）年8月23日、海上保安庁金沢海上保安部を訪問し、恩田 隆部長・港長と花棚靖男管理課長に、能登半島が邑知潟地溝帯により切れ（島のように）見える地点があつたらスケッチと地點を示す地図を下さるようとお願ひし、ご快諾を得た。しかし、平成16年12月8日に花棚氏より、「その後3ヵ月間船の運行や天候条件を勘案して検討して見ましたが、希望のコースに出航できませんでした。」

というご回答があった。そこで、カシミール画像を参考に推測したい。

即ち、図⁽⁷⁾は石川県河北郡の中浜山（地図⁽⁶⁾1）沖10kmの、36°44'46.88"E N・136°34'57.00"S E地点からの計算画像（50ミリレンズ相当）である。

私の実地調査時の、イ眉丈山地並びにウ碁石ヶ峰に向かって続く山地がなだらかであるという印象は、これによつても推測できると思う。

カシミールは計算上の画像であるから、肉眼による印象と同一である保証はなく、天候条件・海面の干満条件は入つていなければ、邑知潟地溝帯の南北幅は右述の通り約3km～4kmと非常に狭いから、この地溝帯が「一ノ海峡ノ如キ形ヲ為ス」ように見える地点は相当限定されるであろう。また、イ眉丈山から始まる図⁽⁷⁾左側の能登半島山地の標高が低いから、Dの地溝帯が水没して切れて見えるまで遠方に退けば、山地も運動して低くなり量感が小さくなるものと推測される。

これに天候条件が加つて見通しが悪くなれば、一層見えにくくなる筈であるから、「能登半島ハ一ノ獨立セル陸島ノ如キ觀ヲ呈」する景観の得られる機会は、非常に限定されるであろうと推測される。

従つて、A論文の私説は、佐藤の意見を無批判に受け入れたものと反省せざるを得ない。この地溝帯を北東の七尾市海岸沖合から望んだ場合、海峡のように見えるか否かについては、平成16年8月23日の実地調査時に雨天となつたため確認できなかつた。地溝帯は七尾市に向かつて狭まくなり、途中狭隘な地帯（幅約1km）がある（図⁽⁶⁾参照）。当 日、七尾海上保安部の古木良一管理課長にこの観点からの印象とスケッチを記録して下さるよう要請し、快諾を得たが、本稿の締切りまでに情報が得られなかつた。七尾湾沖には能登島が大きく浮び、地溝帯方面の視界を塞いでいる。従つて、七尾湾沖合から同地溝帯を見通すとのできる地点も非常に限られる。古木課長によれば、

巡視船が七尾港に入港する際には、船の速力が早いため、衝突に注意を払っている関係上同地溝帯方面の景色に気を配つたことがない。巡視船の船長に求めておくけれども、同地溝帯が七尾市街地附近で終る地点の南北の山が地溝帯に向かつて突出している

（本論文図⁽⁴⁾▲26・28附近：服部）から、海峡のように切れて見える景観を得ることは難しいかもしない。（平成16年8月23日ご教示）

とのことであつた。

従つて、能登半島が同地溝帯によって「一ノ獨立セル陸島ノ如キ觀ヲ呈」する機会があるとすれば、図⁽⁷⁾の如く地溝帯が水没して見える方向から地溝帯に向けて航海した場合に限定されるのではないか。羽咋市（1996）、羽咋市教育委員会（2000）によれば、邑知潟周辺と羽咋市一帯には多数の古代遺跡が分布している。羽咋砂丘の北端附近に能登国一の宮の氣多神社（地図⁽⁶⁾図⁽⁴⁾C）があり、その東南約800mの砂丘上には縄文時代から中世にかけての有名な寺家遺跡（図⁽⁴⁾A附近）がある。その盛期は奈良時代から平安時代にかけてで、その性格は祭祀遺跡であった。

即ち、石川県（1988：37）は、この遺跡を後の氣多神社と関連づけて考察しており、現氣多神社附近にあるシャコデ遺跡に居住した伝統的首長集団が、「7世紀前半の古墳祭祀から神祇祭祀への転換期に当たつて、寺家遺跡のある砂丘で始まった祭祀に係わつている可能性が強く、「8世紀に入つて、シャコデ廃寺が創建され、寺家遺跡では祭祀專業集団の集落と祭祀場が整備され」、その集落は「極めて計画的に配置されており、古代神社における祭祀專業集団の形成過程を知る事ができる」とする。そしてさらに、「天平20（748）年に大伴家持の氣多神社参詣時には、「シャコデ廃寺を訪ねて砂丘上の祭祀專業集団のムラを眺めたと思われる」と推測する。同報告書では、この集団を『和名抄』羽咋郡の神戸の「構成員に含まれるものと想定」（312頁）している。そして、渤海使・使節が能登半島福浦の津（地図⁽⁶⁾E：服部）を経て日本海を渡る際の客船がこの遺跡の周辺に存在した可能性は十分考えられ、古代の氣多神社の主要な行事の一つに日本海を渡る前の渤海使節の安全祈願と、使節がもたらす蕃神による災いを祓う祭祀があり、神社周辺は国際的な霊廟気にあつたものと思われる」（372頁）といふ。

載する^(296・370)。船に係わる出土物の情報は入手できなかつたが、日本海の航海に利用された時代もあり得たであらう(羽咋市^(1996・5))は、史料を示さないが、「古墳時代になると、邑知潟は小海進のため少し変化しますが、以後その大きさを維持し長期にわたり天然の良港として栄えました。」とす

る)。

右の諸状況下に於いて、図⁽⁷⁹⁾の如き邑知潟地溝帶によって能登半島が本土から分離して見える景観に接した航海者達がいたとしても、その機会はやはり非常に少なかつたと思われるから、彼らの体験が『紀』の越洲の地名の起原となつたと考えることには否定的にならざるを得ない。

結局、A論文の再検討結果、越洲の地名については、海上からの景観を起原と考えるけれども、佐藤伝藏の言う意味に於てではなく、本論文第13章に述べた如く(15^ペ上段14行目～19行目)、北陸道の海路を貢納或いは交易のために能登半島を経由して往来する人々の印象や、北陸道諸国^の陸上から海を隔てて能登半島を遠望した際の印象を起原とする考え方である。即ち、本論文第13章(15^ペ上段24行目～15^ペ下段7行目)に述べた、吉備兒嶋(『記』)・吉備子洲(『紀』)、倭嶋(『万葉集』)と同様の地名起原と考える。

本附説をなすに当たつては、羽咋市教育委員会文化財室牧山直樹氏からも多数の文献と共にご教示を賜つた。また、石川県立埋蔵文化財センター企画課中屋克彦氏からご親切を受けた。記して感謝申上げる。

引用文献(前編)(二)「引用文献」に掲載した文献は省略する。また、此處に掲載せず論

文中にのみ出典を記した文献もある)

愛知大字⁽¹⁹⁸⁶⁾ 愛知大学中日大辞典編纂處『中日大辞典 増訂版』、大修館、昭和61年(第1刷)、東京。

飯田武郷⁽¹⁹²²⁾ 飯田武郷『日本書紀通釈』第1巻、大鎧閣、大正11(22)年、東京。

- 石川県⁽¹⁹⁸⁸⁾ 石川県立埋蔵文化財センター編刊『寺家遺跡発掘調査報告Ⅱ 能登浜道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅶ』、昭和53(88)年、金沢市。
- 今井・田中⁽¹⁹⁶⁸⁾ 今井法一・田中圭一『佐渡國府の諸問題』『越佐研究』第26集、新潟県人文研究会編刊、昭和43(68)年3月、新潟。
- 牛島徳次⁽¹⁹⁷¹⁾ 牛島徳次『漢語文法論(中古編)』大修館書店、昭和46(71)年(初版第1刷)、東京。
- 荻原・鴻巣⁽¹⁹⁸⁹⁾ 荻原浅男・鴻巣隼雄校注・訳『日本古典文学全集1 古事記 上代歌謡』(昭和48(73)年初版)、小学館、平成2(01)年(第20版)、東京。
- 荻原千鶴⁽¹⁹⁹⁸⁾ 荻原千鶴『日本古代の神話と文学』、瑞雲房、平成10(98)年(初版第1刷)、東京。
- 金井町教育委員会⁽¹⁹⁸⁴⁾ 本間嘉晴編『泉畠遺跡 黒木御所跡伝承地域 新潟県佐渡郡金井町泉畠遺跡発掘調査報告 1983』(金井町文化財調査報告書第IV集)、金井町教育委員会発行、昭和59(84)年、金井町。
- 河北景柏⁽¹⁷⁸⁶⁾ 河北景柏『助辞鵠』(天明6(1786)刊印本)、吉川幸次郎ほか編『漢語文典叢書』第2巻、汲古書院、昭和54(79)年、東京。
- 川田貞夫⁽¹⁹⁷⁹⁾ 川路聖謨著・川田貞夫校注『島根のすさみ—佐渡奉行在勤日記』(東洋文庫226)、昭和48(73)年初版)、平凡社、昭和54(79)年(初版第2刷)、東京。
- 倉野憲司⁽¹⁹⁷⁴⁾ 倉野憲司『古事記全註釈』第2巻(上巻篇(上))、三省堂、昭和49(74)年(初版第1刷)、東京。
- 小林・青木⁽¹⁹⁸³⁾ 小林達雄・青木 豊編『長者ヶ平』、新潟県佐渡郡小木町教育委員会発行、昭和58(83)年、小木町。
- 西郷信綱⁽¹⁹⁷⁵⁾ 西郷信綱『古事記注釈』第1巻、三省堂、昭和50(75)年(初版第1刷)、東京。
- 坂本太郎⁽¹⁹⁶⁷⁾ 坂本太郎・家水三郎・井上光貞・大野 晋校注『日本書記』上(日本古典文学大系67)、岩波書店、昭和42(67)年(初版第1刷)、東京。
- 佐藤利夫⁽¹⁹⁹¹⁾ 佐藤利夫編『海陸道順達日記』(文化10年篠井秀山著)、法政大学出版局、平成3(91)年、東京。
- 佐渡郡役所⁽¹⁹⁷³⁾ 新潟県佐渡郡役所編『佐渡国誌』(復刻版)、名著出版、昭和48

〔73〕年（原本大正11〔22〕年新潟県佐渡郡発行）、東京。

佐和田町教育委員会1999 新潟県佐渡郡佐和田町教育委員会編刊『荒城遺跡 1999』

（佐和田町埋蔵文化財調査報告書）、平成11〔99〕年、佐和田町。

千田 稔1974 千田 稔『埋れた港』、学生社、昭和49〔74〕年初版、東京。

高橋 保ほか2002 高橋 保・春日真実・川村 尚・堅木宜弘・寺崎裕助『まほらばの時代』（佐渡歴史民俗叢書II）、両津市郷土博物館発行、平成14〔02〕年、両津市。

田中圭一1965 田中圭一「今昔物語集をめぐって」『金掘の歴史 佐渡国村方明細帳』、新潟県立佐渡高等学校郷土部発行、昭和40〔65〕年、佐渡郡佐和田町。

田中圭一1975 田中圭一『佐渡海運史』（佐渡歴史文化シリーズIII）、中村書店、昭和50〔75〕年（初版）、東京。

田中・山本1967 「佐渡国の条里と国衙」「地方史研究」第17巻第2号、地方史研究協議会編刊、昭和42〔67〕年5月、東京。

次田 潤1963 次田 潤『古事記新講』（昭和31〔56〕改修初版）、明治書院、昭和38〔63〕年（改修第10版）、東京。

寺村光晴2001 寺村光晴『越後と佐渡の考古学』（環日本海歴史民俗学叢書10）、高志書院、平成13〔01〕年、東京。

中村啓悟1968 中村啓悟編『日本書紀総索引』（漢字語彙篇）第4巻、角川書店、昭和43〔68〕年、東京。

羽咋市1996 鹿島路町のあゆみ編集委員会編『鹿島路町のあゆみ』、石川県羽咋市立鹿島路町公民館発行、平成8〔96〕年、羽咋市。

羽咋市教育委員会2000 石川県羽咋市教育委員会編刊『羽咋市遺跡地図』（地域に残る文化遺産）、平成12〔00〕年、羽咋市。

畠野町教育委員会1979 畠野町教育委員会編刊『野崎城跡』、新潟県佐渡郡畠野町野崎城跡発掘調査概報、昭和54〔79〕年、畠野町。

羽茂町教育委員会1994 羽茂町城址緊急発掘調査團編『新潟県文化財羽茂城址 佐渡郡羽茂町大字羽茂本郷 羽茂城址緊急発掘調査報告書』昭和52年〔昭和54年〕、羽茂町教育委員会発行、昭和59〔84〕年、羽茂町。

真野町教育委員会1983 新潟県佐渡郡真野町教育委員会編刊『佐渡国府緊急調査報告書』（若宮遺跡）、昭和44〔69〕年、真野町。

山田孝雄1940 山田孝雄『古事記上巻講義』二、国幣中社志波彦神社塙籠神社 古事記研究会編刊、昭和15〔40〕年、宮城県塙籠町。

両津市教育委員会1982 両津市教育委員会編刊『吉住城址』、新潟県両津市吉住城跡発掘調査報告書、昭和57〔82〕年、両津市。

両津市教育委員会2004 歴史地理学会島根大会実行委員会図録編集委員会編『絵図でたどる 島根の歴史』、島根県立博物館発行、平成16〔04〕年、松江。

告書I』、昭和43〔68〕年、真野町。

真野町教育委員会1969 新潟県佐渡郡真野町教育委員会編刊『佐渡国府緊急調査報告書』（若宮遺跡）II、昭和44〔69〕年、真野町。

山田孝雄1940 山田孝雄『古事記上巻講義』二、国幣中社志波彦神社塙籠神社 古事記研究会編刊、昭和15〔40〕年、宮城県塙籠町。

両津市教育委員会1982 両津市教育委員会編刊『吉住城址』、新潟県両津市吉住城跡発掘調査報告書、昭和57〔82〕年、両津市。

両津市教育委員会1983 両津市教育委員会編刊『真木城址』、新潟県両津市真木城跡発掘調査報告書、昭和58〔83〕年、両津市。

両津市教育委員会1983 両津市教育委員会編刊『吉住城址』、新潟県両津市吉住城跡発掘調査報告書、昭和58〔83〕年、両津市。

* * *

故山田弘通先生よりB論文再考の動機の一つとなつた書簡（前編）〔4〕
（上段3行目～22行目）を昭和50〔75〕年3月29日附で賜つてから、本号
の脱稿（平成16〔04〕年11月28日）までに足掛け29年が経てしまつた。この
間、先生は昭和59〔84〕年12月16日帰幽せられ（満84才）、本論文を御
覽に入れることができないのは寔に残念である。謹んでご冥福をお祈
り申上げる。

山田弘通先生遺証

散り急ぐ桜紅葉の彼方には

飛行機雲の棚引きて見ゆ （病床にて）

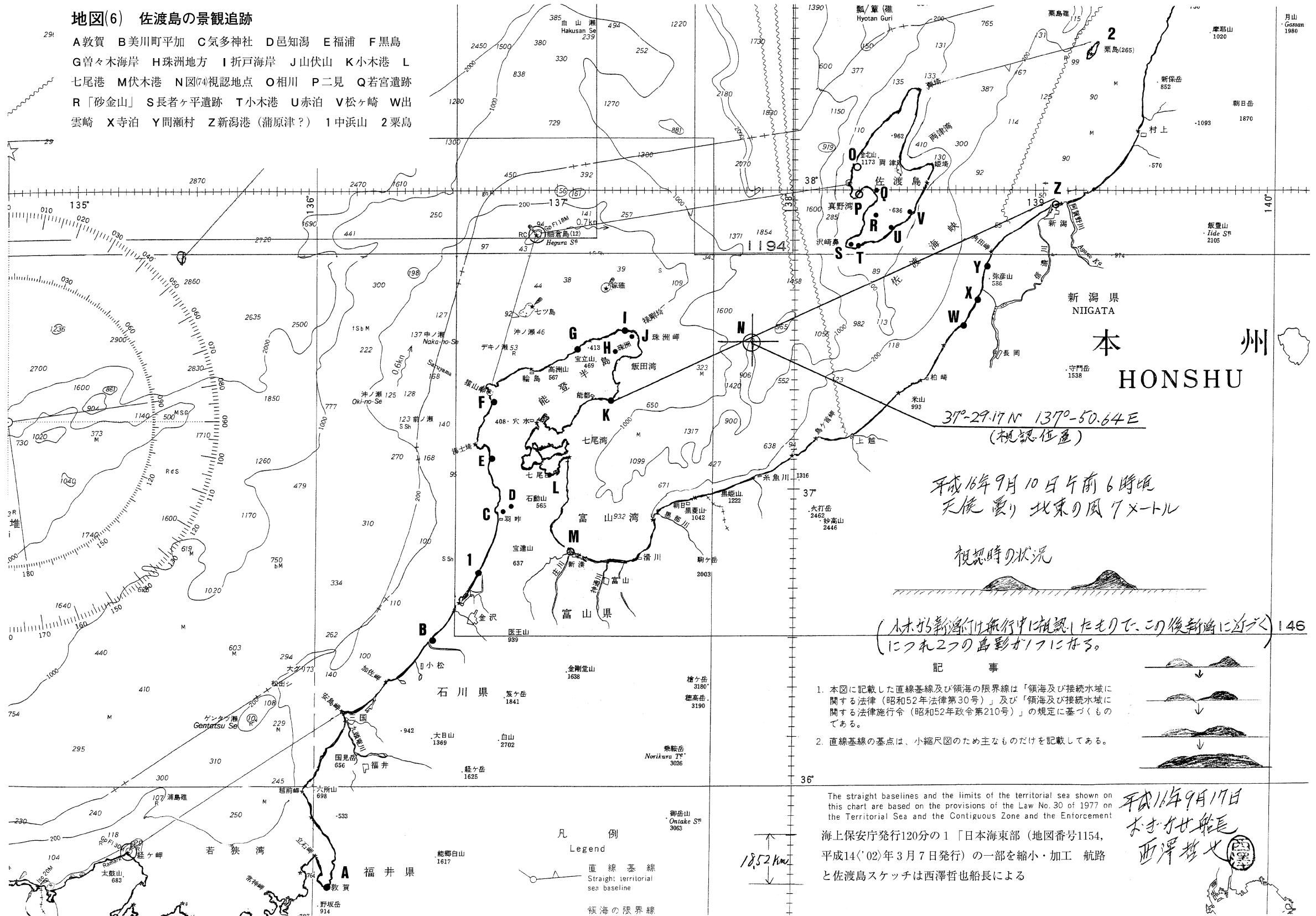
平成16〔04〕年12月7日受理

（終）

〔古事記〕隱伎之三子嶋の地名起源（三）（完）

地図(6) 佐渡島の景観追跡

A敦賀 B美川町平加 C氣多神社 D邑知潟 E福浦 F黒島
G曾々木海岸 H珠洲地方 I折戸海岸 J山伏山 K小木港 L
七尾港 M伏木港 N図74視認地点 O相川 P二見 Q若宮遺跡
R「砂金山」 S長者ヶ平遺跡 T小木港 U赤泊 V松ヶ崎 W出
雲崎 X寺泊 Y間瀬村 Z新潟港（蒲原津？） 1中浜山 2粟島



図(36) 地図(2)隱岐海峡 A 地点より島前島後を望む

地図(2)・図(1)～(35)は前号『大妻女子大学紀要一文系一』36号に掲載

島前三子の景観追跡 ①

昭和60('85)年8月15日午後
マリンスター操舵室(海面からの
高さ約4m)より
晴



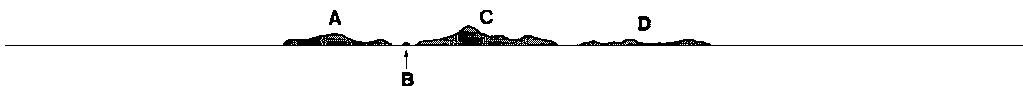
A 地点 $35^{\circ}35'00.00''N$
 $133^{\circ}19'48.00''E$
 平成12('00)年11月24日フェリーおきじ操
 舵室(海面からの高さ約11.6m)からの
 位置確認(門脇隆久一等航海士)

A 知夫里島
 B 西ノ島
 C 中ノ島(大半が水没)
 D 島後(遠方は霞む)

図(37) 地図(2)隱岐海峡 B 地点より島前を望む

島前三子の景観追跡 ①

昭和60('85)年8月15日午後1:20頃
マリンスター操舵室(海面からの
高さ約4m)より
晴



B 地点 $35^{\circ}35'49.80''N$
 $133^{\circ}19'21.60''E$
 平成12('00)年11月24日フェリーおきじ操
 舵室(海面からの高さ約11.6m)からの
 位置確認(門脇隆久一等航海士)

A 知夫里島
 B 大波加島?
 C 西ノ島
 D 中ノ島

図(38) 地図(2)隱岐海峡C地点より島前を望む

島前三子の景観追跡 ①

DがCに繋がりかかる
三子の景観あり

昭和60('85)年8月15日午後1:26
マリンスター操舵室(海面からの
高さ約4m)より
晴



C地点 $35^{\circ}36'29.40''N$
 $133^{\circ}18'58.80''E$
平成12('00)年11月24日フェリーおきじ操
舵室(海面からの高さ約11.6m)からの
位置確認(門脇隆久一等航海士)

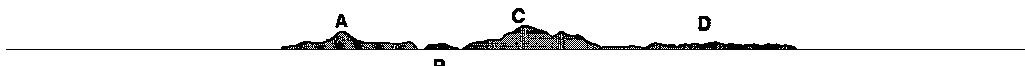
A 知夫里島
B 大波加島?
C 西ノ島
D 中ノ島

図(39) 地図(2)隱岐海峡D地点より島前を望む

島前三子の景観追跡 ①

B C Dが繋がる

昭和60('85)年8月15日午後1:29
マリンスター操舵室(海面からの
高さ約4m)より
晴



D地点 $35^{\circ}39'35.40''N$
 $133^{\circ}17'01.80''E$
平成12('00)年11月24日フェリーおきじ操
舵室(海面からの高さ約11.6m)からの
位置確認(門脇隆久一等航海士)

A 知夫里島
B 大波加島?
C 西ノ島
D 中ノ島

図(40) 地図(2)隱岐海峡 E 地点より島前を望む

島前三子の景観追跡 ①

A～Dが繋がる

『大妻国文』9号論文図(二)近い (野帳)

昭和60('85)年8月15日午後1:33
マリンスター操舵室 (海面からの
高さ約4m) より
晴



E 地点 $35^{\circ}41'42.00''N$

$133^{\circ}15'36.00''E$

平成12('00)年11月24日フェリーおきじ操
舵室 (海面からの高さ約11.6m) からの
位置確認 (門脇隆久一等航海士)

A 知夫里島

B 大波加島?

C 西ノ島

D 中ノ島

図(41) 地図(2)隱岐海峡 F 地点より島前を望む

島前三子の景観追跡 ①

A CがBの前に出る

昭和60('85)年8月15日午後1:37
マリンスター操舵室 (海面からの
高さ約4m) より
晴



A B Cの量感が対等となる

この地点で最も三子の形態となる (野帳)

A 知夫里島と大波加島?

B 西ノ島

C 中ノ島

F 地点 $35^{\circ}42'36.00''N$

$133^{\circ}15'06.00''E$

平成12('00)年11月24日フェリーおきじ操
舵室 (海面からの高さ約11.6m) からの
位置確認 (門脇隆久一等航海士)

図(42) 地図(2)隱岐海峡G地点より島前を望む

島前三子の景観追跡 ①

A CがさらにBの前に出る

昭和60('85)年8月15日午後1:42
マリンスター操舵室(海面からの高さ約4m)より
晴



三子の景観続く

G地点 $35^{\circ}44'06.00''N$

$133^{\circ}14'12.00''E$

平成12('00)年11月24日フェリーおきじ操舵室(海面からの高さ約11.6m)からの位置確認(門脇隆久一等航海士)

A 知夫里島と大波加島?

B 西ノ島

C 中ノ島

図(43) 地図(2)隱岐海峡H地点より島前を望む

島前三子の景観追跡 ①

BがA Cに挟まれる
正しく三子だ(野帳)

昭和60('85)年8月15日午後1:46
マリンスター操舵室(海面からの高さ約4m)より
晴



『大妻国文』9号論文図四に近い(野帳)

H地点 $35^{\circ}47'18.00''N$

$133^{\circ}12'48.00''E$

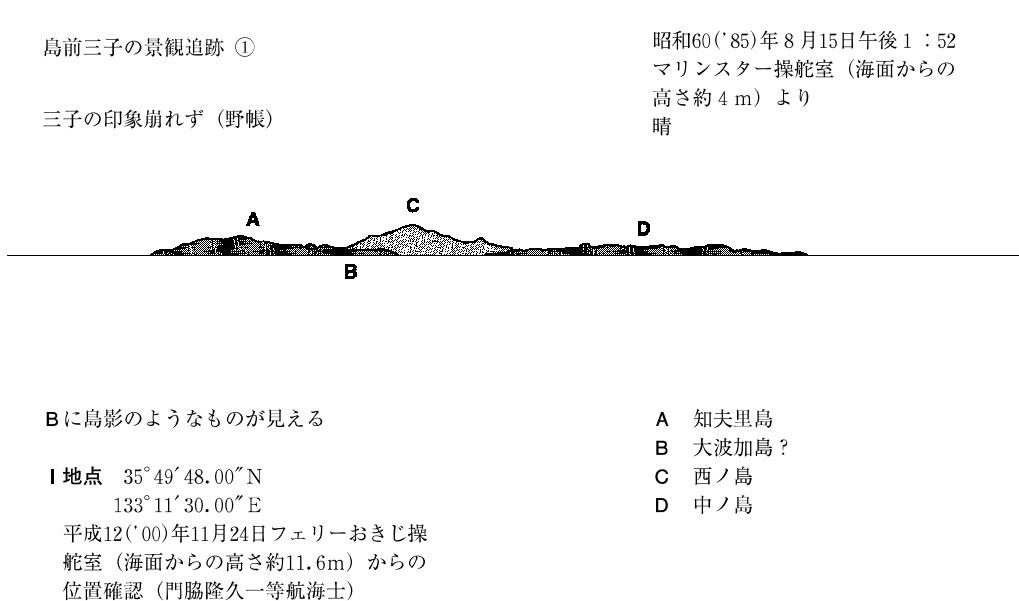
平成12('00)年11月24日フェリーおきじ操舵室(海面からの高さ約11.6m)からの位置確認(門脇隆久一等航海士)

A 知夫里島と大波加島?

B 西ノ島

C 中ノ島

図(44) 地図(2)隠岐海峡 I 地点より島前を望む



図(45) 地図(2)隠岐海峡 J 地点より島前を望む

島前三子の景観追跡 ① 昭和60('85)年8月15日午後1:58
マリンスター操舵室(海面からの高さ約4m)より
晴

まだ三子の印象を受ける『大妻国文』6
号論文の訂正の必要なし(野帳)



島前に接近するにつれ船が東寄りになるた
め Bが右側にせり出し Aの量感が増す

J 地点 $35^{\circ}52'06.00''N$
 $133^{\circ}10'12.00''E$
平成12('00)年11月24日フェリーおきじ操
舵室(海面からの高さ約11.6m)からの
位置確認(門脇隆久一等航海士)

A 知夫里島
B 大波加島?
C 西ノ島焼火山
D 西ノ島の一部?
E 中ノ島

図(46) 地図(2)隱岐海峡 K 地点より島前島後を望む

島前三子の景観追跡 ①

辛うじて三子の印象が残る（野帳）

昭和60('85)年8月15日午後2:06
マリンスター操舵室（海面からの
高さ約4m）より
晴



K 地点 $35^{\circ}55'30.00''N$
 $133^{\circ}08'24.00''E$
 平成12('00)年11月24日フェリーおきじ操
 舵室（海面からの高さ約11.6m）からの
 位置確認（門脇隆久一等航海士）

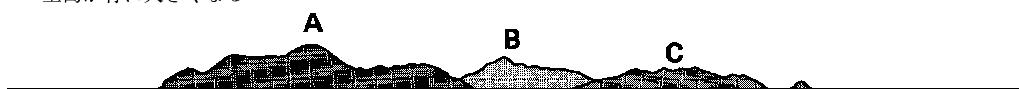
A 知夫里島
 B 大波加島（初めて独立した島となる）
 C 西ノ島
 D 中ノ島
 E 西ノ島の一部？
 F 島後
 G 竹島（大波加島と繋がっている）

図(46') 地図(2)隱岐海峡 J 地点の僅かに南の地点より島前を望む

島前三子の景観追跡 ①

船が知夫里島寄り（南西寄り）
 になると3者の量感が崩れ、知夫
 里島が特に大きくなる

平成12('00)年8月8日午後4:20
 フェリーおきじ操舵室（海面から
 の高さ約11.6m）より
 晴

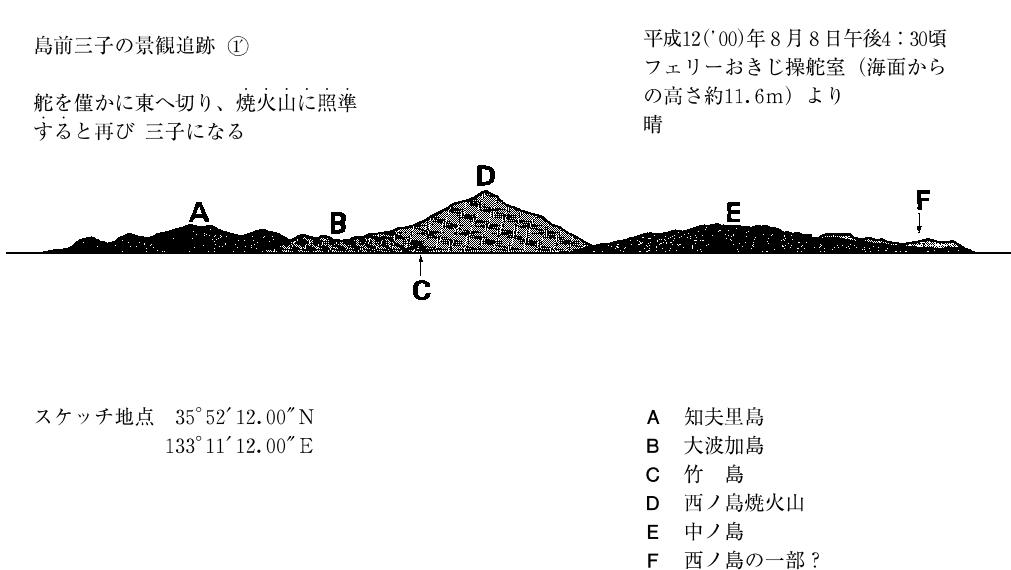


スケッチ地点 $35^{\circ}51'00.00''N$
 $133^{\circ}11'00.00''E$

晴天だが海上が霞み島後は見えない

A 知夫里島
 B 西ノ島焼火山
 C 中ノ島

図(46) 地図(2)隱岐海峡 J 地点の僅かに北の地点より島前を望む



図(47) 地図(3)隱岐海峡ア地点より島前島後を望む

地図(3)は前号『大妻女子大学紀要一文系一』36号に掲載

島前三子の景観追跡 ②

E F に G が重なる
E F が繋がる

平成12(00)年8月13日午前11:25頃
フェリーおきじ後部大甲板（海面か
らの高さ約7.5m）より
晴

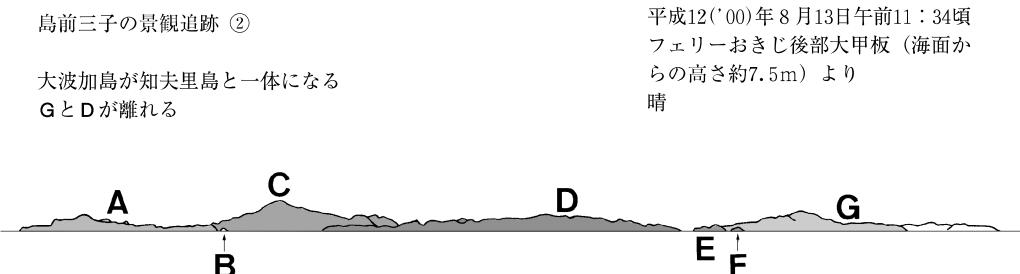


図(47)～(53)（地図(3)ア地点～キ地点）は島前
が確実に三子に見える地点を選びながら航
海した際のスケッチ

ア地点 $35^{\circ}58'24.60''N$
 $133^{\circ}06'54.00''E$

A	知夫里島
B	大波加島
C	竹島
D	西ノ島
E	中ノ島
F	松島
G	島後

図(48) 地図(3)隱岐海峡イ地点より島前島後を望む



イ地点 $35^{\circ}56'12.00''N$
 $133^{\circ}09'30.00''E$

A 知夫里島
 B 竹島
 C 西ノ島
 D 中ノ島
 E 松島
 F 大森島
 G 島後

図(49) 地図(3)隱岐海峡ウ地点より島前島後を望む

島前三子の景観追跡 ②

平成12('00)年8月13日午前11:44頃
フェリーおきじ後部大甲板（海面から
の高さ約7.5m）より
晴



ウ地点 $35^{\circ}53'48.00''N$
 $133^{\circ}09'54.00''E$

A 知夫里島
 B 竹島
 C 西ノ島
 D 中ノ島
 E 松島
 F 大森島
 G 島後

図(50) 地図(3)隠岐海峡工地点より島前を望む

島前三子の景観追跡 ②

島後が霞み見えなくなる

午前11：55頃知夫里島東端が西ノ島
と重なり西ノ島の一部のように見え
始める

平成12('00)年8月13日午前11：59頃
フェリーおきじ後部大甲板（海面か
らの高さ約7.5m）より

晴



工地点 $35^{\circ}50'42.00''N$

$133^{\circ}12'12.00''E$

A 知夫里島

B 西ノ島

C 中ノ島

D 松ノ島

E 大森島

図(51) 地図(3)隠岐海峡才地点より島前を望む

島前三子の景観追跡 ②

平成12('00)年8月13日午後0：08頃
フェリーおきじ後部大甲板（海面か
らの高さ約7.5m）より

晴



才地点 $35^{\circ}47'24.00''N$

$133^{\circ}14'36.00''E$

A 知夫里島

B 西ノ島

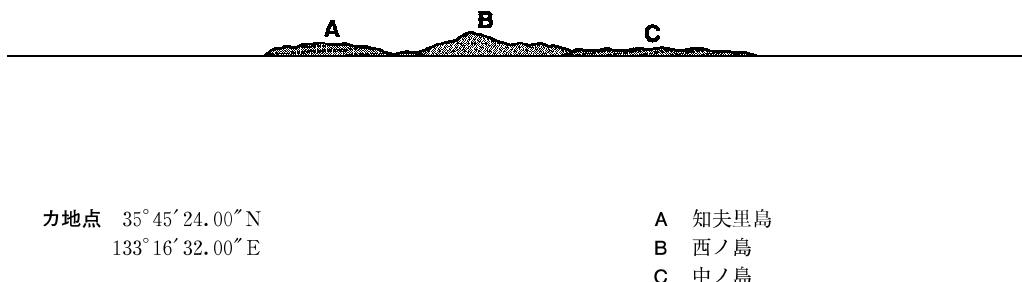
C 中ノ島

D 松ノ島？

図(52) 地図(3)隠岐海峡力地点より島前を望む

島前三子の景観追跡 ②

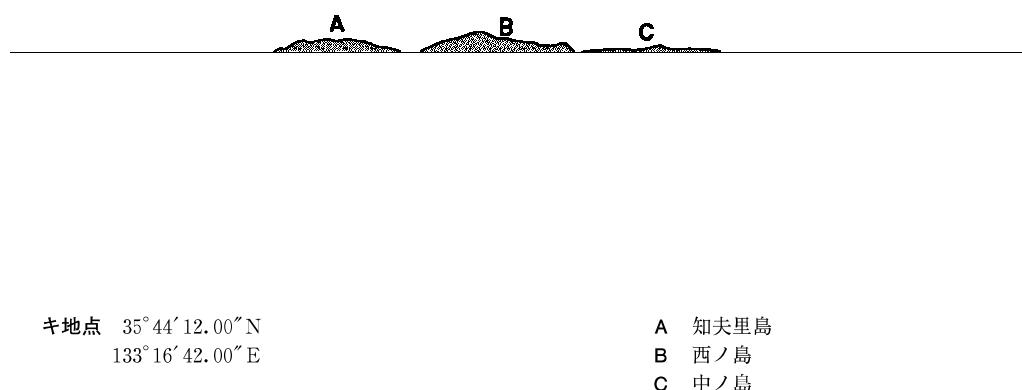
平成12('00)年8月13日午後0:16頃
フェリーおきじ後部大甲板（海面から
の高さ約7.5m）より
晴



図(53) 地図(3)隠岐海峡キ地点より島前を望む

島前三子の景観追跡 ②

平成12('00)年8月13日午後0:22頃
フェリーおきじ後部大甲板（海面から
の高さ約7.5m）より
晴



図(54) 地図(4)a 地点 美保関町千酌漁港北東沖より島前を望む

地図(4)は前号『大妻女子大学紀要一文系一』36号に掲載

島前三子の景観追跡 ③

昭和60('85)年8月10日午前10:55
島根町野井在住渡部弘美氏所有弘
進丸甲板(海面からの高さ約0.4m)
より
快晴



三子の景観なし
島後は霞んで見えない

A 知夫里島
B 西ノ島
C 中ノ島?

図(55) 地図(4)b 地点より島前を望む

島前三子の景観追跡 ③

昭和60('85)年8月10日午前11:15
弘進丸甲板(海面からの高さ約0.4
m)より
快晴



A Cの量感が小さく まだ三子に見えない
島後は霞んで見えない

A 知夫里島
B 西ノ島
C 中ノ島

図(56) 地図(4)c 地点より島前を望む

島前三子の景観追跡 ③

昭和60('85)年8月10日午前11:25
弘進丸甲板 (海面からの高さ約0.4
m) より
快晴



Aの量感が増し Bが見えてくる
Cの量感も少し増し 三子に近づく
島後は霞んで見えない

A 知夫里島
B 大波加島?
C 西ノ島
D 中ノ島

図(57) 地図(4)d 地点より島前を望む

島前三子の景観追跡 ③

昭和60('85)年8月10日午前11:46
弘進丸甲板 (海面からの高さ約0.4
m) より
快晴



三子に近づく
島後がかすかに見えるが スケッチ不能

A 知夫里島
B 大波加島?
C 西ノ島
D 中ノ島

図(58) 地図(4)e 地点より島前島後を望む

島前三子の景観追跡 ③

昭和60('85)年8月10日午後0:05
弘進丸甲板(海面からの高さ約0.4m)より
快晴



島前→境港 くにが丸との交叉地点にて
島後がやっとスケッチできる程度に見える

e 地点 $35^{\circ}41'00.00''N$
 $133^{\circ}18'00.00''E$
(くにが丸からの連絡による)

- A 知夫里島 頂点は赤禿山
- B 西ノ島の一部?
- C 西ノ島焼火山
- D 西ノ島の一部
- E 中ノ島
- F 島 後

図(59) 地図(4)f 地点より島前島後を望む

島前三子の景観追跡 ③

島前島後の量感対等となり双子
に見える(野帳)

昭和60('85)年8月10日午後0:55
e 地点より8マイル弘進丸甲板
(海面からの高さ約0.4m)より
快晴



A CがBの手前に重なり さらに量感を増す
島前三子の印象あり

- A 知夫里島と大波加島?
- B 西ノ島
- C 中ノ島
- D 松島
- E 大森島
- F 島 後

図(60) 地図(4)g 地点より島前を望む

島前三子の景観追跡 ③

昭和60('85)年8月10日午後1:50
弘進丸甲板(海面からの高さ約0.4m)より
快晴



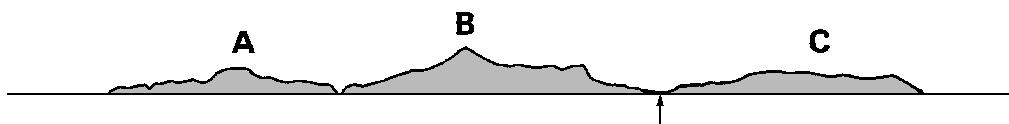
図(59)よりもさらに三子に見える

A 知夫里島
B 西ノ島
C 中ノ島

図(61) 地図(4)h 地点より島前を望む

島前三子の景観追跡 ③

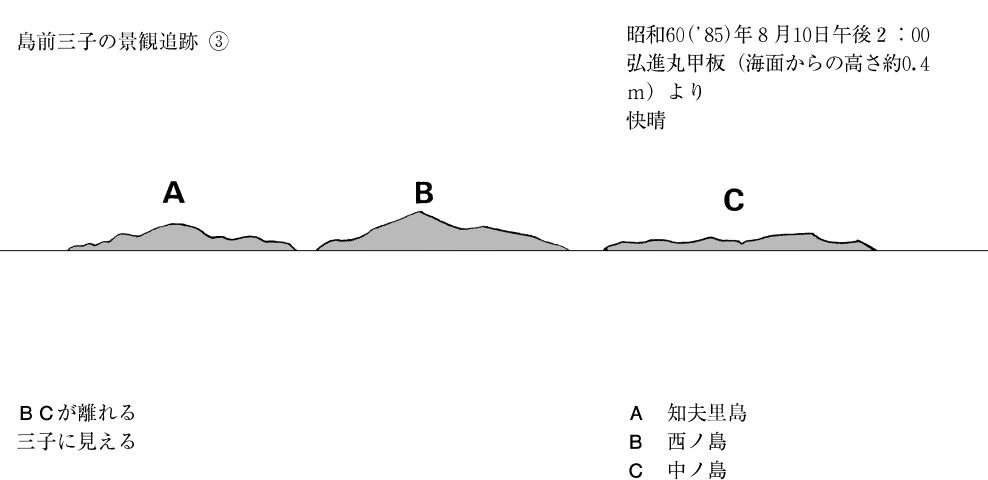
昭和60('85)年8月10日午後1:58
弘進丸甲板(海面からの高さ約0.4m)より
快晴



A Bが僅かに離れる
B Cは水平線すれすれに接する
三子に見える

A 知夫里島
B 西ノ島
C 中ノ島

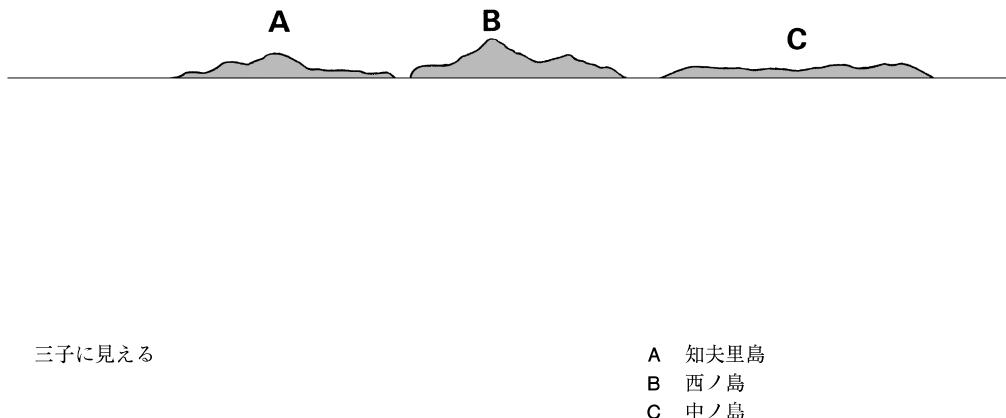
図(62) 地図(4)i 地点より島前を望む



図(63) 地図(4)j 地点より島前を望む

島前三子の景観追跡 ③

昭和60('85)年8月10日午後2:03
弘進丸甲板(海面からの高さ約0.4m)より
快晴



図(64) 地図(4) K 地点より島前を望む

島前三子の景観追跡 ③

昭和60('85)年8月10日午後2:10
弘進丸甲板(海面からの高さ約0.4m)より
快晴



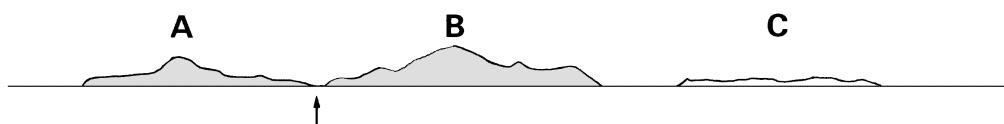
A B Cはまだ三つに離れて見える
島影が薄くなり写真撮影不能

A 知夫里島
B 西ノ島
C 中ノ島

図(65) 地図(4) I 地点より島前を望む

島前三子の景観追跡 ③

昭和60('85)年8月10日午後2:15
弘進丸甲板(海面からの高さ約0.4m)より
快晴



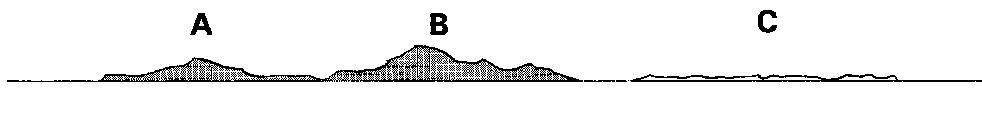
A Bが僅かに接する
CはA Bよりも島影が薄くなる

A 知夫里島
B 西ノ島
C 中ノ島

図(66) 地図(4)m 地点より島前を望む

島前三子の景観追跡 ③

昭和60('85)年8月10日午後2:20
弘進丸甲板(海面からの高さ約0.4
m)より
快晴



A Bが繋がる
Cがほとんど水没しかかる
三子の印象なし

A 知夫里島
B 西ノ島
C 中ノ島

図(67) 地図(4)n 地点より島前を望む

島前三子の景観追跡 ③

昭和60('85)年8月10日午後2:25
弘進丸甲板(海面からの高さ約0.4
m)より
快晴



以上の追跡の結果 島前を三子に見るためには 中ノ島が知夫里島・西ノ島と相並ぶ位の量感となるまで接近し かつ知夫里島と西ノ島とが離れて見えるように東へ寄ることが必要であることが判った(野帳)

A 知夫里島
B 西ノ島
C 中ノ島

図(68) 地図(4)o 地点より島前を望む

島前三子の景観追跡 ③

昭和60('85)年8月10日午後2:35
弘進丸甲板(海面からの高さ約0.4m)より
快晴



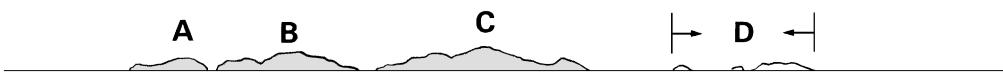
A Bが水平線に僅かに接する
B Cが少し切れる
Dはほとんど水平線下となり
完全に分断される

A 知夫里島の西南端
(知夫赤壁方面?)
B 知夫里島赤禿山
C 西ノ島 頂点は焼火山
D 中ノ島

図(69) 地図(4)p 地点より島前を望む

島前三子の景観追跡 ③

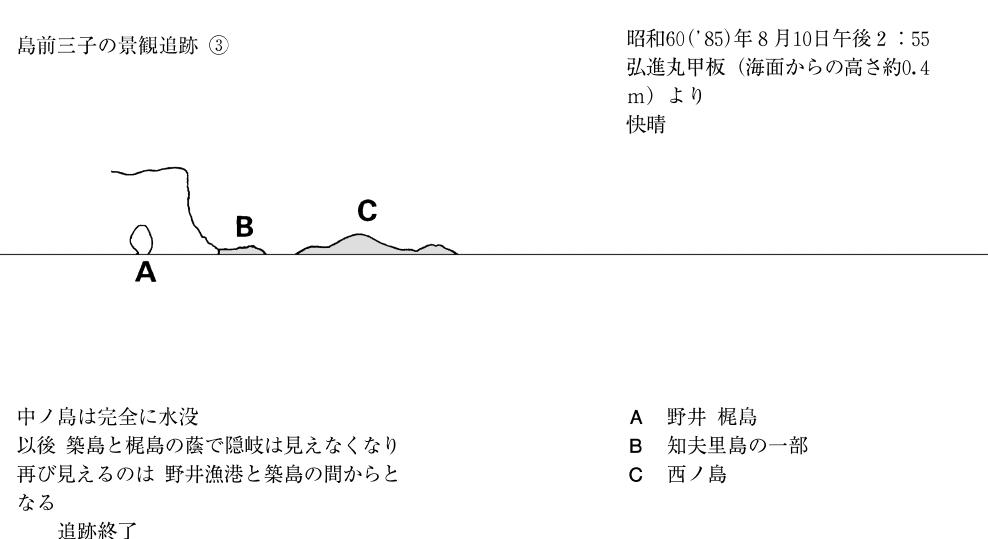
昭和60('85)年8月10日午後2:50
弘進丸甲板(海面からの高さ約0.4m)より
快晴



A B Cが切れる
西ノ島の形がこれまでとは変わる
中ノ島はほとんど水没し高所が所々見える

A 知夫里島の東南部
B 知夫里島 頂点は赤禿山
C 西ノ島 頂点は焼火山
D 中ノ島

図(70) 地図(4) q 地点野井漁港東1.25km小ゾ島より島前を望む

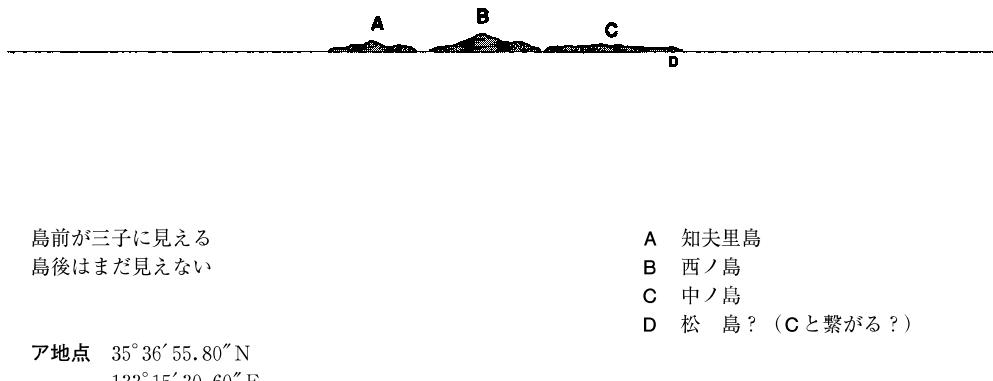


図(71) 地図(5)隠岐海峡ア地点より島前を望む

地図(5)は前号『大妻女子大学紀要一文系一』36号に掲載

双子の景観追跡

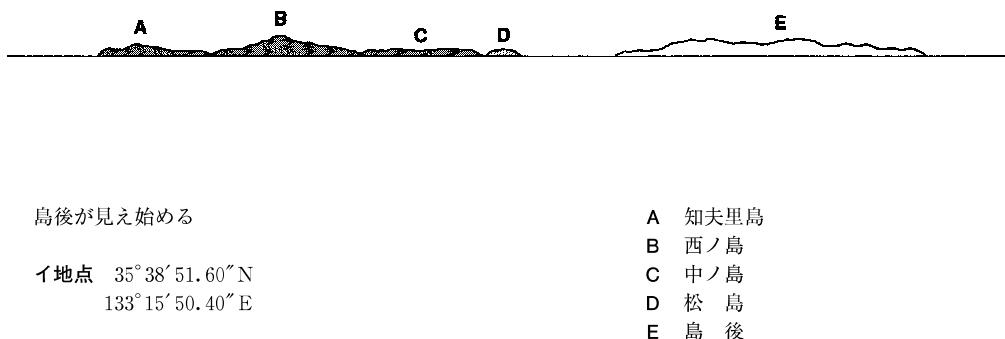
平成12('00)年8月15日午前9:17
フェリーくにが操舵室(海面から
の高さ12.0m)より
快晴



図(72) 地図(5)隱岐海峡イ地点より島前島後を望む

双子の景観追跡

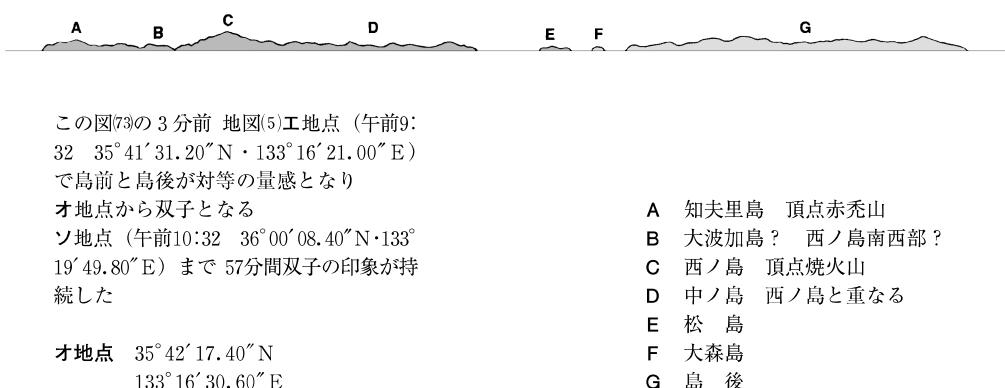
平成12('00)年8月15日午前9:23
フェリーくにが羅針儀甲板（海面
からの高さ約14.4m）より
快晴



図(73) 地図(5)隱岐海峡オ地点より島前島後を望む

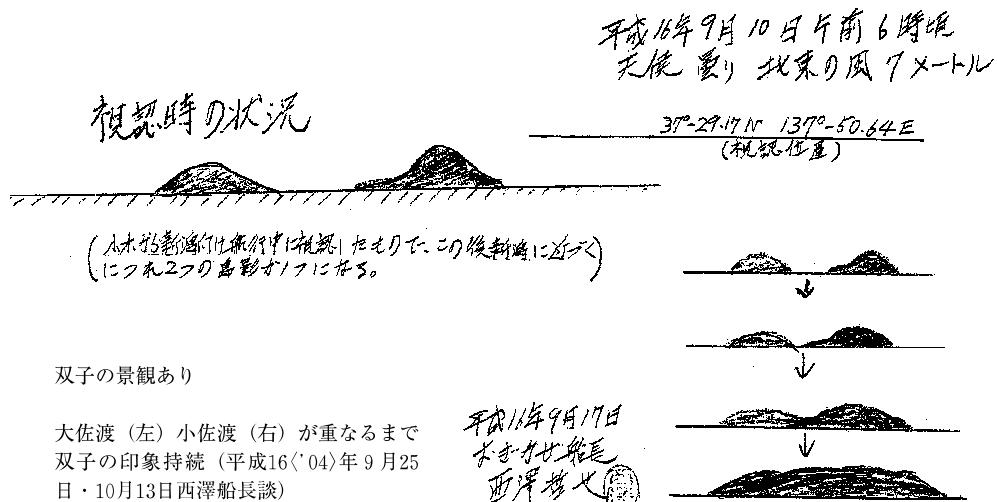
双子の景観追跡

平成12('00)年8月15日午前9:35
フェリーくにが羅針儀甲板（海面
からの高さ約14.4m）より
快晴



図(74) 地図(6)〈本号所収〉航路上での佐渡島景観追跡

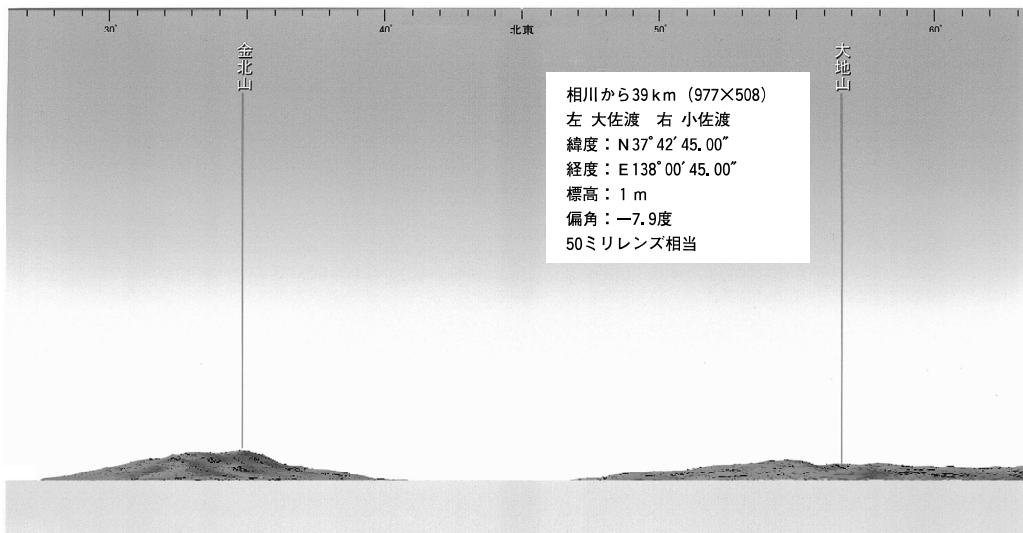
巡視船おきかぜ船長西澤哲也氏スケッチ



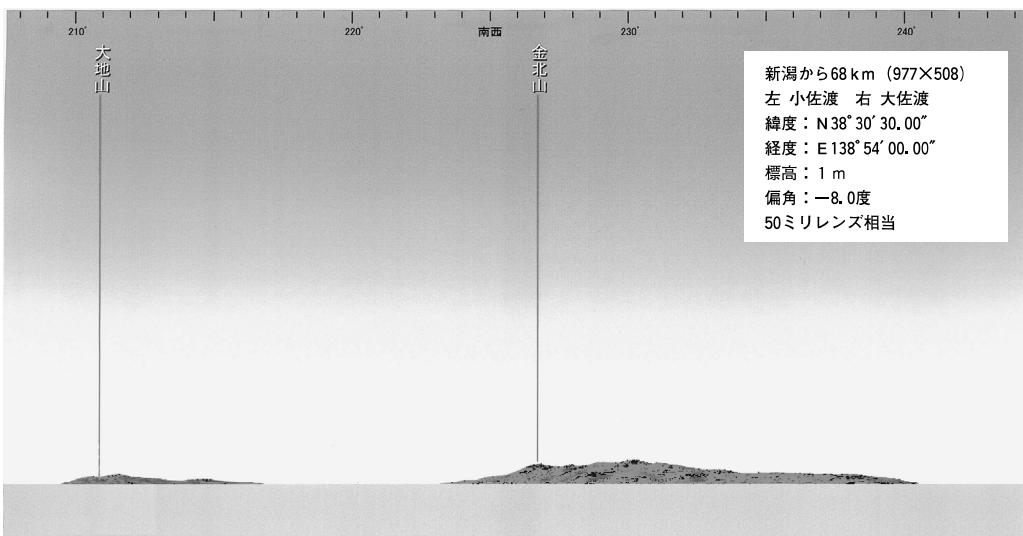
図(75) 能登半島・佐渡島中間地点よりカシミール3D画像



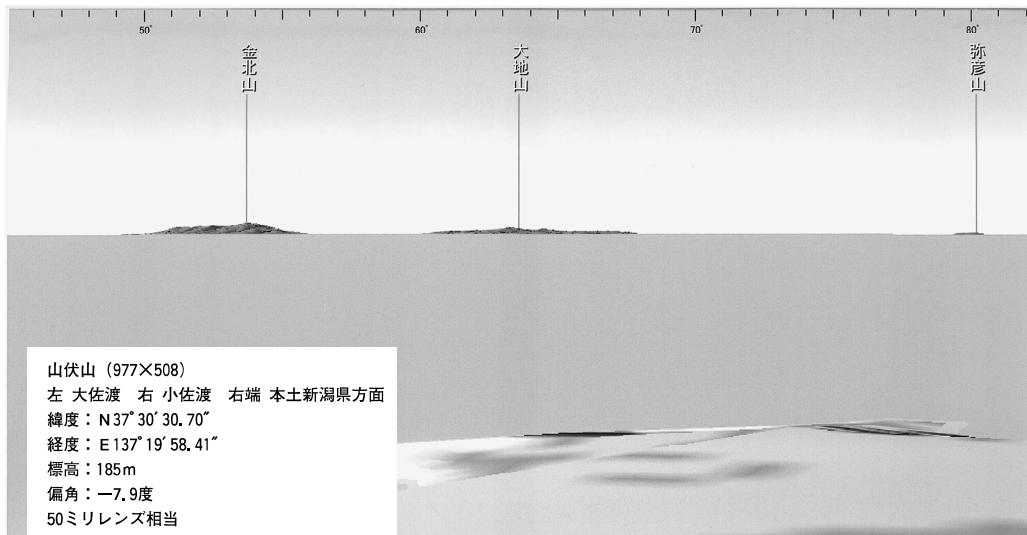
図(76) 大佐渡相川(地図(6)O)から南西39km海上より佐渡島カシミール3D画像



図(77) 新潟(地図(6)Z)から68km海上より佐渡島東北側カシミール3D画像



図(78) 能登半島先端山伏山（地図(6)J）より佐渡島カシミール3D画像



図(79) 石川県中浜山（地図(6)I）から10km海上より邑知渦地溝帯を中心とするカシミール3D画像

